

小長井町の文化財



井崎まっこみ浮立

小 長 井 町



オガタマノキ

発刊にあたって

小長井町長 古賀忠臣

美しい景観と豊かな自然に恵まれた、我が小長井町には、太古から現在に至るまで連綿とした先祖の営みの跡が残されております。

有形、無形を問わず、文化財は我が町の歴史、伝統、文化など正しい理解のために欠くことのできないもので、かつ、将来の文化の向上、発展のための基礎となるものであります。

私たちの先祖が残し伝えてきた文化遺産は、これを保護し、子孫に正しく継承していくかなければならないと思います。

町では平成2年より、町内の遺跡、史跡等、文化財を調査、整理してまいりました。結果をまとめ、この小冊子となりました。

自分が住んでいる郷土を深く知ることによって、その地域に誇りを持ち、愛着を感じ、文化財の関心を高めることに、本誌を役立てて欲しいと存じます。

最後になりましたが、本誌発刊にあたり、執筆に御協力をいただいた文化財保護審議委員の方々に厚くお礼を申し上げまして、発刊のことばとさせていただきます。

発刊にあたって

小長井町教育長 中尾利治

小長井町は、美しい自然と温暖な気候風土に恵まれ、私たちの祖先は、この自然の中で地域に根ざした文化や伝統をはぐくんできました。その歴史と風土、祖先が當々として築いてきた有形、無形の文化財は、郷土の歴史を物語る貴重な財産であり、私たちの心のよりどころとして、今なお感動を与えております。私たちは、長い歴史を経て今日に受け継がれてきたこれらの貴重な文化財を、これからも大切に保存、活用しながら次の世代に伝えなければなりません。しかしながら近年、都市化が進み、ともすれば郷土に生きてきた先人の心が忘れられたり見失われないためにも、また、郷土の文化財に一層目を向け理解を深めていただくことを願つて、このたび「小長井町の文化財」を発刊しました。この本が文化財愛護意識を高め、ひいては郷土への愛情をはぐくむ糧として、広く活用されれば幸いです。

終わりに、刊行にあたってご協力いただきました関係の皆様に深く感謝申し上げます。

目 次

小長井町の概要と沿革	8
1 オガタマノキ（国指定天然記念物）	9
2 長戸鬼塚古墳（県指定史跡）	10
3 井崎まっこみ浮立（県指定無形民俗文化財）	11
4 大峰古墳（町指定史跡）	12
5 丸尾古墳（町指定史跡）	13
6 城山古墳（町指定史跡）	14
7 南平墓石群と遠嶽氏（町指定史跡）	14
8 田原の六地蔵（町指定史跡）	15
9 代官モクどんの石棺（町指定有形文化財）	16
10 市杵島神社、馬頭観音（町指定有形文化財）と翁塚	17
11 岩宗墓石群（鶴田遠江守、町指定史跡）	18
12 阿蘇神社	20
13 田代搦の子安観音	21
14 大久保と井手掘権右衛門	22
15 尾ノ上の地蔵さん	23
16 権現神社	24
17 天松山称念寺	25
18 実盛神社	26
19 牧の堤の神	27

20 牧の三夜さんと弘法さん	29
21 牧の金毘羅さん	30
22 牧の太子さん	31
23 牧部落と石丁場	33
24 藤原神社	34
25 お目島さん	35
26 案山子と田の神さん	37
27 鎮西（八郎）さん	38
28 高頭山淨真寺	39
29 小川原浦の金比羅さん	41
30 新田原の一本松	42
31 田原神社	43
32 田原溜池と辯財天	44
33 飯盛神社と城山城跡	45
34 仏石	46
35 木下吉之丞翁	47
36 宝池山西圓寺	48
37 山茶花の茶屋	49
38 山茶花の神さん	50
39 境界標柱	50

40 稚児の塔	51
41 淀姫神社	52
42 井崎の金比羅さん	53
43 眶月坊	54
44 井崎の観音さん	55
45 中道の龍宮さん	56
46 坂下の馬頭観音	57
47 築切の観音さん	58
48 諏訪神社と境内の神々	59
49 権現岳城址	60
50 八坂神社（祇園さん）	61
51 阿弥陀如来と阿弥陀崎	61
52 麗沙天岳	63
53 柳南の弘法さん	64
54 黒仁田の麗沙天さん	65
55 栗踏浮立	65
56 みさかえの園	67
小長井町郷土史年表	69
あとがき	77



小長井町史跡地図



小長井町の概要と沿革

小長井町は長崎県北高来郡の東北部に位置し、西側は高来町に、東側は佐賀県藤津郡太良町に隣接しており、北は多良岳（983m）に連なる山系で南側は有明海をへだて、国立公園雲仙岳と相対峙している。交通については、JR九州長崎本線が海岸線を走り本町には小長井駅と長里の二駅がある。行政区域は有明海に面した海岸線を底辺とする二等辺三角形状で、地形は多良岳の火山活動によって形成されたもので西北に多良連山があり本町での最高地点は標高650mで有明海に向って扇状になだらかに傾斜している。河川は2級河川長里川が最大であり、長里川、船津川などの大小の河川が渓谷を刻んでいる。水利は乏しく田原溜池をはじめとする溜池が各地に散在している。平地は殆んどなく海岸の一部で干拓事業が行われ水田化されている。地質は多良岳の活動による安山岩層の新成岩でこの岩石が「帆崎石」の銘柄で本町の特産となっている。

沿革として原始古代から本町周辺で人が生活していた。江戸時代には現在の小長井町の区域は諫早藩の領地に含まれていた。以後統合合併が進み幾度かの変遷の後明治22年町村制実施時に小川原浦村、長里村、井崎村の頭文字をとって小長井村となった。昭和41年11月1日町政を施行し小長井町となり、町政施行20数年を経過し、町民憲章、町木、町花も制定され（昭和61年）町としての体制づくりが一段落し、新たな発展を期しているところである。現在人口7,007人、世帯数2,326戸、で自治体としては小規模ではあるが産業交通の発達に伴い平和で豊かな町に成長してきた。また国指定天然記念物に「オガタマノキ」は1000年の偉容をほこり、県指定「長戸鬼塚古墳」もあり、県指定無形民俗文化財「井崎まっこみ浮立」は古くから住民の間に根づき今日に継承されている。近時地域の核となる公園の整備が行われ、特に山茶花高原の整備にいたっては今後も周辺にその施設を拡充し、町を代表する総合的なピクニックパークの一大公園としての整備充実がすすめられている。

1. オガタマノキ

(国指定天然記念物)

JR長里駅から長里川に沿ってさかのぼること約2.5km。川内の集落を通りすぎて坂を上った所に、道路にかぶさるように大きく枝を拡げた一本の巨木がある。これが、昭和26年に国の指定をうけた天然記念物であり、町制20周年を記念して小長井町の木に制定されたオガタマノキである。



オガタマノキ

この木はモクレン科オガタマノキ属で学名は *Micheria Compressa* Sarg.といい、本州の房総半島以西、四国、九州から沖縄の山地に自生している暖地性の高木である。和名のオガタマは、招靈（おぎたま）が転化したものといわれ、神前に供えて神を招くというので、神社などによく植栽されている。現在、神事にはツバキ科のサカキまたはヒサカキが使われているが、昔サカキとして用いられたのはこの木であったと言われる。

オガタマノキの葉は互生して、長さ5~12cm、幅2~4cmの長楨円で先端がやや細くなっている。厚い角質で、表面は濃緑色で光沢があり、裏面は白色を帶び2cm程の葉柄をもっている。春に葉のつけねに、径3cm位の黄白色で中央がやや赤味を帶びたガクと花びら6枚ずつの花が咲き、微香がある。秋にはごつごつした形の殻をもつた果が熟し、裂けた部分から赤い種子がのぞいてくる。この頃これを振るとシャラシャラと音がするので、神楽の舞いに使われる鈴の源は、この実ではないかという説もある。

植物図鑑によると、「大きなものは樹高15m、径80cmにも達する。」とあるが、本町のものはそれよりはるかに大きく、樹高20m、幹の周りが9.1m、樹齢1000年以上であり、長崎大学の外山三郎先生も、著書「長崎県の天然記念物」の中で、「オガタマノキとしては日本一の巨樹で、もちろん自生と思われる。」と紹介されている。

この木の材質は緻密で美しい木肌であるため、建築材や家具材としてよく利用されているが、本町の木も昔から何回か切られている。今はその切り口から伸びた枝が、四方に広がっている。更にエノキ、ムクノキなど10種ほどの樹が着生して、あたかも1本の木にいろいろな木の葉が混じって生えているようであった。平成3年の台風19号で大枝の一部が折れ、樹勢も弱ったので、大きな寄生樹が取り除かれスリムになった感じであったが、若い枝が再びのびだしてきており、たくましい生命の力が感じられる。

2. 長戸鬼塚古墳（県指定史跡）

古墳は、多良山系から有明海に伸びた標高約10mの低い丘陵の先端近くに立地している。JR長崎本線小長井駅から南西に徒歩で約15分の所にある。

古墳の西側に墓地があり、周辺が開墾された際、箱式石棺が7～10基ほど発見された。その中から人骨や鉄刀などが出土したといわれているが、現在それらの遺物の所在は不明である。これらの箱式石棺は比較的小形のもので、棺床には玉砂利を敷きつめたものもあったと言わわれている。この場所には、まだそれらの残りが存在する可能性も考えられ、帆崎遺跡として登録されている。

古墳の形状は円墳で、墳丘の直径約15m、高さ約5mである。墳丘の東側の裾の部分は、開墾の際に若干削り取られている。石室の規模等からみて築造時代にはもう少し大きかったと判断される。

石室は、南東方向に開口する複室の両袖式横穴式石室である。その構造は、安山岩の巨石を腰石に使用し、やや小形の礫石をその上に積み上げ、これらの石材の隙間に小さな礫石を詰め込むという工法が取ら



長戸鬼塚古墳

れている。またこれらの石材は、内側に傾けながら積んでいく「持ち送り工法」がとられているため、天井が床面より狭くなっている。

石室は、玄室（死者を安置する一番奥の部屋）、前室・羨道で構成されており、石室全長で9.6mである。玄室の長さは4.6m幅は最奥部で2.6m、高さ3.4mである。前室は長さ1.6m、幅1.8mである。この石室の特徴として、前室と羨道を区切る仕切石があげられる。この石は壁面に埋め込みます、壁面に接して立てられている。同様の方法は、本古墳の西南西約2kmにある大峰古墳に見られる。本古墳の築造は、古墳時代後期(6世紀前半)とされている。

本古墳は、線刻画を有する装飾古墳として古くから知られていた。これらの線刻画は、船・鯨などの形象的な文様と鋸歯文などの抽象的な文様である。特に船と鯨とわかる線刻画は、有明海で古代人が捕鯨を行っていたことを証明したもので、日本の捕鯨史にとっても注目されるところである。

装飾古墳は、有明海沿岸に多くの分布をみるが、県内には本古墳を含めて5例しか知られておらず、古墳そのものの研究はもとより、当時の生活的一面を知るうえで、貴重な古墳である。

3. 井崎まっこみ浮立（県指定民俗無形文化財）

井崎浮立は300年の歴史を持つ伝統芸能であり、その昔より五穀

豊穣、雨乞い等の神事や庶民唯一の慰安娯楽として伝承され深く庶民生活の中に溶け込んで来た。

別名を巻込浮立とも言われている一種独特の浮立である。

昭和47年全国青年大会郷土芸能部門に県代表として出場最優秀賞受賞、52年長崎県無形民俗文化財の指定を受ける。

各種神事を始め慶祝行事等にも出演するなど広く民衆に親しまれている郷土芸能である。



井崎まっこみ浮立

4. 大峰古墳（町指定史跡）

小長井町の最も南側よりに位置し、封土の約半分が削られており羨道もこわれているが、本来は前方後円墳であったかもしれないといわれている。巨大で平らな自然石をつかって内部をつくり、四角に囲いその上に比較的小さな石を徐々に積みあげて上部にいくほどせまくなるように作られ、天井石は数枚の石を段々に重ねて組み立ててある。（持ちおくり）その上を多量の土でおおい、土が流れぬよう石をめぐらしている。（ふき石）棺を納める玄室と前室及び廊下



大峰古墳全景



大峰古墳

の役割をはたす羨道からなっているが、大峰古墳は天井石と天井石の間が棚のように間隔が作られ他の古墳にみられない独特の構造になっているのが特徴である。古墳時代（1700年～1300年前）この古墳は中期から後期のものと思われるが、弥生時代以来の稻作が生産の基盤となったもので生産の盛んな地方つまり広い平野をもつ地方には豊かで大きな力をもつ指導者が生まれたのであるが、ここ小長井の古墳を作った人々はどのような生活を営んでいたのであろうか、有明海は古来天産物豊かで、魚や貝類の種類も多く、しかも潮の干満の差も大であるので古代の郷土人は豊かな海の幸と背にした多良山麓の山の幸を得て、平和に暮したことと想像される。

5. 丸尾古墳（町指定史跡）

丸尾古墳は長戸古墳から北西へ約400m、小深井川の西岸の標高約20m位の丘陵の東斜面にある。小深井バス停より3分にあり、丘陵東部は採石のため削られた崖の上にある。そのため墳丘の東部分は、封土や充填用の栗石さえも流失してしまった。

古墳全体は荷重のバランスが崩れ、玄室入口の棟石とか、東壁の一部の石に亀裂が入って危険な状態である。羨道もかなり破壊され格子文の線刻がある奥壁の剥落が著しい。



丸尾古墳

墳丘は高さ約5m、直径約10m位の小円墳で、東南に開口している。現在は奥壁を残して崖下に落下、保存について検討中である。

6. 城山古墳群

(町指定史跡)

城山古墳群は4基の小さな古墳からなり一部は壊れていますがほぼ全体の形を残す円墳である。



城山古墳

土地の古者の話
しによれば別に2基の古墳があったと言われる。

町内の古墳は構造上から幾つかの時代に分類されるが殆ど大なり小なり壊されているので遺物が見当らず時代を明確にする事は困難である。しかし城山古墳から鉄劍が出土したと伝えられており町指定の文化財である。

7. 南平墓石群と遠嶽氏 (町指定史跡)

鶴田遠江守の居城があった権現岳の南側丘陵（南平部落の裏山）に宝篋印塔、五輪の塔が数十基祭祀されている。数百年の歳月を経て祭祀も絶え放置状態であったものを、昭和50年頃村人達の手によって、山中に埋没、散乱したものを寄せ集めて祭祀されたため完塔は数基であるが山中には墓域と思われる所が数箇所見つかっている。地元ではこの墓石群も鶴田遠江守の一族の墓であろうといつているが、遠江守の討死は天正10年（1582年）南平の墓石には至徳2年（1385年）とある。

諫早史談誌によれば、この塔は遠岳氏のもので天正5年（1577年）文献史料にみえる遠岳治部少輔堯運（増）の祖と推定される。遠岳



南平墓石群

氏の逝去に伴い遠岳一門による供養塔とみるべきであろう。遠岳氏の起源については不明であるが遠竹についての文献史料は高城寺文書がある。伊佐早の庄遠岳村とあり宝治元年（1247年）肥前の国佐嘉郡、藤原（高木氏）勝丸に対して鎌倉幕府は伊佐早の庄遠岳村井崎の地頭職をめいじた。天正12年（1584年）鍋島直茂に対して西郷一門の起請文を差し出している。その中に遠岳治部少輔堯運（増）の名前が見え伊佐早城主西郷氏の武将として仕えていた事がうかがえる。それ以降遠岳氏の動向を示すものとして小城家中遠岳氏の祖、遠岳秀慶は藤津郡遠岳山の城主の子であるという。それによると秀慶の父は遠岳城主であったが龍造寺隆信の藤津郡、高来郡と南進策による圧迫が強まり遠岳城主は筑後にのがれ隠棲したと思われる。又有馬家へ仕え越前の国、丸岡に転封した有馬家中の遠岳氏も遠岳出身であるといわれる。と記されている。

8. 田原の六地蔵（町指定史跡）

場所 県道小長井線田原入口バス停

六地蔵は壇陀、宝珠、宝印、持地、除蓋障、日光の六体地蔵の総称であるが、この六地蔵には2児をいだく子育て地蔵が刻んである。六地蔵は道路の別れ道によく建っており、人々の行く先々を示している。つまり人生の行く道を悟らせる意味でもある。町内の六地蔵



田原の六地蔵

の中でも一番古く、台石に天文17年10月13日（1548年）の銘が刻んである。

9. 代官モクどんの石棺（町指定有形文化財）

昔々、諫早御館山^{みたち}の稻荷神社にいたコウエモン狐は、神通力があるというので有名だった「永昌のモクどん」という代官が「おいが死んだらからだをお前にやるけん、おいを金持ちにしてくいろ」といつて願をかけ、コウエモン狐と約束をした。

ところが、代官のモクどんがコウエモン狐の神通力のおかげで、数年後は大金持ちになり、金持ちになると誰でも、我ままになるもので自分のからだを狐にやるのがおしくなり、いろいろと考え自分が死んだら石の棺に入れてもらえば、狐に食われることはなかろうと考え、帆崎石で有名な牧の石工に石棺をつくってもらった。

石棺が出来たので、牧の海岸でそれを船に積みこんでいたところ、それまでよかつた天気がにわかにかき曇り大しけとなり、船もろと

も石棺は沈んでしまったといわれている。

この石棺は、昔から田ノ尻の小川のそばに永く放置してあったが、戦後牧の墓地に運び、

葬式の棺をのせる台に使用していたが、いまは火葬になりその必要もなくなり、どこにもないめずらしい文化財として墓地の一角に保存され、代官塙どんの夜も眠れぬ不安な気持ちや、コウエモン狐のくやしい気持ちなど、昔のこととこれからも語りかけてくれるものと思われる。



代官モクどんの石棺

10. 市杵島神社、馬頭観音（町指定有形文化財）と翁塚

祭神市杵島姫命、寛文、延宝時代に諫早内匠眞清及び藤原茂真（4代）の信仰により長里大久保に本社を創立した。文久元年旧領主諫早家より幣帛を供進せられてから近隣はもとより遠方からも参詣し尊信する者が多くなった。明和8年に神殿、拝殿を再建し安永6年修理を加えさらに昭和62年神殿、拝殿ともに改修築し稀に見る神殿となった。神社の前を横切る竹崎街道は、諫早藩主も



市杵島神社



馬頭観音

しばしば通られた、ある日の休憩中藩主の愛馬が急死し、藩主はいたくこれを憐れみ、ここに葬りその靈を弔うために堂を建てて馬頭観音を祭られた。藩主はこの境内に社殿を新築して諫早家の床の間にあつた弁天さんをここに移したとある。

境内の芭蕉翁塚は石門のある東側にある。碑には「観音

のいらかみやりつ花の雪」と刻んであって文化13年（1816年）に野出、梅江、濃波、春芦、夏寥、方居、時習らの長里村の俳人達によって建てられたもので、文化10年頃は諫早、長崎方面は俳句の盛んな時であったらしく、諫早慶厳寺、深海塩屋崎、小野金比羅山や、この長里翁塚が建てられている。翁塚とは俳聖松尾芭蕉を慕って翁にあやからんとした。ここの句はいかにも馬頭観音堂の桜の老樹や大銀杏にふさわしく私たちの先人が、この観音堂に集まって創作にふけった心境がおもいおこされてほほえましい。馬頭観音は路傍の石仏として、地蔵、庚申とともに一般に親しまれてきた。他の観音は慈悲相であるが、この観音は忿怒相で頭上に馬頭を戴き、胸前で明王馬口印（両人差指の先端を合わせる印）を結ぶのが特徴である。その像容は多様であるが、一般には一面二臂、又は三面六臂が多い、ここのは三面六臂である。

11. 岩宗墓石群（町指定史跡）

遠竹の氏神、諏訪神社の少し手前の高台に通称「殿の屋敷」と呼ばれている所が鶴田遠江守の菩提寺金胎寺趾である。その広場の西側の一段高い所に宝篋印塔、五輪塔数十基が祭祀されてある中で一番大きい宝篋印塔が鶴田遠江守の墓石である。総高138.4cm、銘

文は基礎中央に3列（奉寄進石塔一墓、山庖宗年、とぎみずのえうま天正拾年壬午七月
日）塔身には算木紋が入っている。一般には「遠江守」と呼んでいるが碑名は「塔登守」である。鶴田遠江守は伊佐早領主西郷氏の家臣で、遠竹地方を支配する権現岳城主であった。遠江守は竹崎城主北島藤左右門に攻められ必死の防戦も及ばず一族皆討死した。時は天正10年7月16日（1582年）であった。地元ではこの日を遠江守の命日とし7月16日（現在は8月16日）には地区民こぞって墓前において浮立を奉納し、子供達による栗踏浮立も奉納される。

五輪塔とは、方、円、三角、半月、円形よりなる塔形で地、水、火、風、空の五大をあらわすという、密教において創始され平安時代（1100年前）頃より用いられた。石造塔婆として五輪塔には、上部の風輪、空輪を一石でほって全体を4個に分割製作したものと、小形で全体を一石で彫りあげた一石五輪塔がある。

宝篋印塔は宝篋印陀羅尼經によるとこの經を安置する塔は、三世一切の諸仏の全身舍利を奉藏するものとみなされるので、その趣旨によって造った塔を宝篋印塔という。銅、木、泥、石塔などいろいろあるが形は単層方形の塔でふつう基礎、塔身、笠、相輪の各部からなり笠の四隅に特色のある隅飾り突起がある。金、銅でできた塔は古く、石造塔は鎌倉時代（約750年前）以後の遺品である。



ほうきょういんとう
宝篋印塔

岩宗墓石群

もともとは宝篋印陀羅尼經を収めるために作られた四角形の塔である。四角い石を基壇、基礎、塔身、笠、相輪と順に積み重ねて作

るが、笠の形式に特長がある。（幾つも板を重ねたように段々を作るが、最も広い四隅に方位という三角形の飾りをつける。）また塔身の四面には四仏の種字（梵字）を刻する。一般には経文の有無に関わらず、この形のものをすべて宝篋印塔と呼んでいる。

12. 阿蘇神社

タテイワタツノミコト

肥後の国阿蘇大神の御分靈建磐龍命を弘和元年（1381年）長里舟津名椋木に祀った。当時、付近住民が厚く崇敬した。城崎名勘々山に御遷座、享禄元年（1528年）4月大峰名の絶勝の地を選び移転して一字を創立し豊年を祈った。

享禄2年宝殿を新築して長里の氏神様として氏子から崇敬された。社殿、神殿、中殿、拝殿からなり境内西側には稻荷大明神を祭つてある。川良橋から田代の方へ登る坂道の中程、老杉そびえ、ムクの大樹老い茂る森に包まれた神社である。中殿、拝殿は昭和57年10月大改修がなされた。今より600年位前、弘和元年にこの辺が肥後の阿蘇氏とかかわりがあったらしく、阿蘇神社の分靈を鎮座したのである。眼下に長里川が流れているが、明治の初めまでは有明海が深く湾入して、この境内の崖下まで波がきていたと言う。例祭は春が4月17日、秋は10月17日で、当日は長里一円の氏子



阿蘇神社

が参詣し、千灯籠の祭は9月15日で大変にぎやかである。社殿には、ナマズの絵がはられてあるが皮膚病なまづの全快を祈る昔からの信仰であろう。また昔から今もこの地方ではナマズは阿蘇宮さんの使いだからと言って食べない風習がある。

鳥居は元禄5年（1692年）の奉建であるが、境内入口の一の鳥居は昭和9年4月に建替奉獻されている。

13. 田代搦の子安觀音

この菩薩は田代一の氏神様で氏子の峯祭り氏子と搦祭りの氏子の2組があつてお祭りをする。昔は庵寺があつて木像であったが今は石像になっている。例祭は3月18日と12月18日で祭りの当日は、ごつくうさんや果物を觀音さんに供え各班の祭りもとの家に集まってご馳走を食べながらお祭りをする。祭りもとは家まわりである。ここ の觀音は母乳の神さまとして名高く遠くから参詣の人々がやってきた。その人達は2袋にお米を入れて参詣し、1袋は持ち帰り炊いてご飯を食べると母乳がよく出ると言われている。

町内ではここに打越の稻荷さん境内、川内の辻殿さん境内、足角部落の中程に子安觀音を祭つてある。子安觀音は別名子育觀音または慈母觀音とも呼ばれ稀に持児觀音と言う場合もある。庶民の安産や育児を祈願する子安信仰から形像されたものである。その形像は幼児を抱く二臂像であつて石仏として各地にみられる。



子安觀音

14. 大久保と井手掘権右衛門

大久保とはクボ、サコなどといい谷のことであるが、相当に長い谷なのでオオクボと名づけたのであろう。この大久保の開墾（元禄時代）後は区画整理をして、竹崎街道の北側を大搦名と名づけ、道の南側を大峰名としたという。カラミ田（搦田）籠田とは新しく開けた水田のことであり、今でも田代の上をカラミと呼ぶ。この竹崎街道は水の浦から北に登る大山道を境にして、小長井町に入った小高い丘に大久保の墓がある。そこには長里歴代の名家で赤司、馬渡、土橋家などの墓が昔を物語りげに立ち並んでいる。その中に自然石の大石に「噫井手掘権右衛門之碑」が立っている施主赤崎松五郎とある。そこから北方300m井手の分岐点に石碑が立ち「水道開祖神」と正面に刻み、右側に明治7年春新建、左側に小城芦苅産と彫ってある。この水道開祖の神は、大久保井手（ウークボイデ）を掘った井手掘権右衛門という説と、大久保開墾の主導者馬渡氏の先祖だとい

う説がある。井手の長さは12kmあって灌漑面積水田25町歩（25ha）である。権右衛門さん（姓赤崎）は佐賀畝刈の人で（小城芦刈）小城から来られたと郷土史には書いてある。生地については、はつきりした定説はない。設計は馬渡家の先祖で大工事の土木主任が権右衛門さんであった。長里川白瀧から延々と曲りくねって12km、よくも当時の技術をもって、これを完成了した努力には感嘆の外はない。先人の郷土づくりの努



井手掘権右衛門の墓

力にはほんとうに頭の下る思いがする。ウーコエというのは一ノ越、二ノ越、あるいはトリゴエと谷から次の谷へ越えるところをいう意。井手明神で分水して右手は殿崎、水の浦丘陵の田へ、左手は大久保の棚田に水を配分した。殿高野の丘に立って見おろせば左手大久保、田代方面一帯は耕地整備された水田に早苗が整然と植えられ、早苗
饗の宴の歌が聞こえてくるようだ。これも艱難辛苦先輩の尊い汗の奉仕によって開墾された先見の明るい農業改善の姿だと思う。東側丘陵は大久保みかん園で枝もたわわに実った蜜柑は眼の覚めるような眺めである。

15. 尾ノ上の地蔵さん

地蔵菩薩（釈尊入滅のち弥勒仏の出現するまでの間）は、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）の衆生を救済する菩薩で、分かりやすく言えば六道に迷った人を救う仏様で、子供の遊び場に祭られて子供の安全を願っている。像形は立像、座像のほか少ないけれど、半跏趺坐像があり、一般には右手に錫杖、左手に宝珠の姿が多い。次いで合掌の姿があり、子供を抱いたものなどがみられる。我国では平安期に極楽浄土の信仰も盛んになるに伴い流行し、近世になってさらに民間信仰と結合し、庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏として祈願され、地蔵講とか地蔵盆などと年中行事の一つとなつた。24日を地蔵の縁日として宝前に花果を供え祭ることは全



尾ノ上の地蔵さん

国的にみられる。また、^{さい}賽の河原で地蔵が子どもを庇護すると説かれるところから、育児に強く結びつき子育て地蔵の名で信仰されている。子安地蔵さんは尾ノ上部落の氏神様で、脚気なおしのお地蔵さんと言われていた。

木像でお参りに来た人たちが削っていたのでだんだん小さくなつてしまい、今は石の地蔵さんに変ってしまった。8月4日が例祭で、昔は尾ノ上部落の人々がだんごを供えご馳走を持って参拝し、部落をあげてなかなかの賑わいであったという。※菩薩とは、菩提薩埵が略されたもので、「悟りを求める修業中の人」という意味。

16. 権現神社

地域の人は舟津の権現さんと呼んでいる。打越から舟津、田代にぬける途中権現川右手の中腹にこんもり繁った森の中に権現神社がある。権現さんは仏さんで如意輪観音菩薩が衆生済度のために化して十二単の女官の姿として現れた。こ



れを権
現さんと呼んで祭った。

如意輪とは「車輪をもつ如意珠」の意味であり、この観音の名は「車輪がどこへでも転がっていくよう、意のままに現れ、六道の衆生の苦しみを取り去り利益を与える。」ことに由来する。この権現さんの例祭は10月13日で舟津、打越、足角の氏子によって営まれる。祭りもとは輪番で、舟津部落の氏神様でもある。権現川は長里川の支流の小川であり、権現川の「もよ



権現神社

女] の昔話も面白く語りつがれている。もよ女は竹崎街道に沿う茶店の茶くみ女で稀に見ぬ美女で男という男は皆彼女の手玉にとられ悩殺されてしまったと言う。

◎権現川に、もよ女のおちよんちよんな、へそから3尺5寸われちょつたちゅうコラコラ、そげんまぢわれちょるぎんにや、お上（オウエ）のご難題に（ゴナンデ）ほたくりならりゅうべ……お上外科ぢやなし、何の知らっそかん、チョロベーチョロべー。

17. 天松山称念寺（浄土真宗本願寺派）

戦国時代末期天正の頃、当地の地頭職で新宮蔵人という武士がいた。その子新宮太右衛門尉主人は深く仏教に帰依して、その子玄番は出家して了西と称した。了西は田結村（現飯盛町）の西明寺三代住職正専に師事していたが、矢上村に切支丹の侵入を防ぐため、一字を建立して称念寺と号し、正専自身は更に日見村に桜谷寺を建立して自らの住居とし、了西を称念寺住職と定めた。慶長10年（1605年）に至り、了西の父主人は、寺もろとも了西を古里へ帰らせることとなり、本堂などを現在地に移築したのが本寺の起源である。以来連綿として法灯を守り伝えられ、現在15代住職永井三樹丸師へと至っている。



天松山称念寺

また一説によれば、新宮蔵人が出家して海運と名乗り、長里村鳥越にあった阿弥陀堂を川内に移したのが起源とも言われている。寺の入口のすぐ右側に、刻まれた文字も判然としない大きな石塔があるが、これが新宮蔵人の墓が移しおかれたものであると言われる。

先年本堂の改築のおり、須弥壇の床下の柱に寄り添うようにおかれていた石柱が発見された。その四面には梵字が三文字ずつ刻まれている。この石柱は、誰が、いつ、何のためにおいたものか不明である。

しかし、郷土史家故木下弘先生によれば、「称念寺はもともと真言宗の寺であった。それは平安時代から鎌倉時代にかけて真言宗が殷盛を極めていたころ、多良岳の金泉寺と竹崎の観音寺を結ぶ線上には幾多の真言宗の寺が建立された。鳥越にもその頃真言宗寺院が建立されたのであろう。鳥越の東の山中に坊の跡と言うところがある。ここには幾多の宝篋印塔、五輪の塔の一部が散乱している。坊と言えば寺ということである。この寺は尼寺であったと言われるが、室町時代初期までは鳥越にこの寺はあったものと考える。この寺をどういう訳で移転したか不明であるが、要するに戦国時代の初期に誰かが正阿弥陀の地に移し、更に戦国時代の末（天正年間）に新宮蔵人が現在地寺屋敷へ移転した様に思われる。」と述べておられる。今回発見された石柱が、この宝篋印塔の塔身である可能性が極めて高く、木下先生の推論を裏付ける重要な意味をもつ文化財であろう。

18. 実盛神社

上牧の竹崎街道沿いにある社が実盛神社で、明治36年6月に奉納された鳥居が立っている。

祭神は、斎藤実盛と言われ実盛は源平時代の平家方の武士で篠原の戦、寿永2年（1183年）6月1日木曾義仲軍と戦い、実盛は白髪を染めて若者のように勇戦しついで討ち死した武将である。

実盛はそのとき戦場の稻株につまずいて倒れ、敵の手塚太郎光盛に首を取られたと言われ、実盛はその事を無念に思い稻の害虫とな

り、稻にあだをすると言われるようになり、農民のあいだに実盛の靈を鎮める祭りをする風習がはじまつたと言われている。

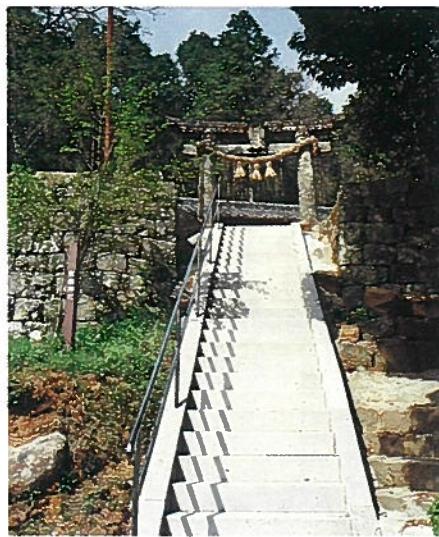
御神体は石組みの祠に鳥帽子をつけ左に刀をさし右手に采配を持った石像を祀ってあり、御神体の右側に安永二巳歳六月吉辰日（1773年）左側面に世話人原田覚兵衛、并村中と朱入りの刻銘がみられる。

この実盛さんが祀られた約40年ほど前の享保17年（1732年）は西日本各地で蝗（いなご）の被害により大飢饉がおこり、その後実盛を祀るようになったと言われている。

このように実盛さんを氏神として祀っているのは、牧部落の先住民が熊本方面から来た平家の落人と言われているからであろう。

牧部落の先祖は実盛さんを氏神、五穀豊穰の神として祀り、12月8日が祭礼日で、田祈祷、願成就、五穀成就には浮立を奉納し、灯籠祭りは旧暦の8月8日に行われる。

竹崎街道の辻にあった古い馬頭観音も境内のヤマモモの木のしたに移して（昭和10年頃）祀ってある。拝殿の裏にある手水鉢は嘉永5年（1852年）に武富時次郎と言う人が寄進して、鳥居の右手にある手水鉢は、昭和8年10月に秀島宗次、一ノ瀬静尾、岸本辰三、三池伊平次さんたちが、41才の厄払い願成就記念として、唐獅子牡丹を彫りこんだ手水鉢を奉納している。



実盛神社

19. 牧の堤の神

牧には小川原浦との境を流れる小深井川、この川に合流する上牧川、



牧の堤の神

ひらき
開き谷を流れる開川の3本の河川がある。

牧の堤は開川の上流の町道農場線のそばに、周囲600mぐらいの灌漑用溜め池があり、この溜め池の右側の杜の中に、立派な石造りの祠がある。

この祠のなかには地神、弁財天、水神と彫りこんであり、石の祠の前は観音開きの扉があり祠の三面に、溜め池造築の経緯などを漢文で記し要約すると、長里村の東の山あいに牧名とい

う20戸ばかりの部落があり、ここには水田があまりなく、そこに住む人達は水田が少ないので長い間困っていた。

そこでこの事を諫早藩の役人に申し上げ、役人は第14代領主茂孫公に言上し、民治に心をそいでいた領主はそれぞれの役人に命じて、谷あいの適地に溜め池の造築に着工、長さ約60m、高さ約9mの築堤で締め切り（貯水量6万トン）溜め池を築き、開墾地までの長い水路をつくり水田の耕作をさせるようにした。タネ

そのため日照りが続いても水の心配がなくなりその恩恵をうけることができたので藩主は僧に命じて仏を祀るのに都合のよい聖地に弁財天を祀らせ、その恩恵がいつまでも続くことを祈願した。

領主茂孫公の仁心に感謝し学者にこのいわれを書いてもらいそれを祠に刻み、堤の傍らに建立して祀らせることにした。

嘉永4年（1851年）4月と刻んであり工事関係役人、木下伝之進勝明他10名、石工、長左工門、この碑文を書いた藩の好古館本多教授等の刻銘がある。

この溜め池は140年間も灌漑用水を貯えまた大雨の際は洪水調節

の役割をして地域住民の生活を支えている。

この祠のそばには日清、日露、日独戦に参戦した人達の在郷軍人記念碑もこの社の中に建立されている。

20. 牧の三夜さんと弘法さん

牧公民館から上牧かみまさきに行く急な坂道をのぼる右手の道のうえに三夜さんと弘法大師を祀った境内がある。

ここが三夜さんと言われているので三夜さんをはやく祀ったものと思われる。

三夜祀りは、月を祀る習俗で、陰暦17日の月を「立待の月」18日を「居待の月」19日を「寝待の月」20日以後の月を「臥待の月」と言い、昔の人は月を愛で月を信仰の対象とし月の出を待ったと思われる。

月待が行われるのは特定の月で正月・5月・9月・11月など月の組み合わせはいろいろで、月待の日は23日に最も多く行われている。

月待の行事は同一村落などの、おなじ信者が仲間を組んでその仲間で講をつくり講仲間の家を交互に講宿として、きめられた「23日」にその家に集まり神仏に供物して、無病息災を祈りながら楽しくみんなで飲食をして一日の疲れをいやしながら、夜の更けるのも忘れて歓談し遅い夜半の上弦の月を拝みながら家路についたのであろう。この月待の本尊は阿弥陀如来の右脇侍で知恵を表す勢至菩薩で、左脇侍の慈悲を表す観音菩薩とともに阿弥陀三尊を構成する菩薩と云い、勢至菩薩の有縁日が23日にあたりこの日が、月待の日となり「霜月三夜」と呼ばれている。

11月23日は弘法大師の信仰とも結合していると言われ三夜さんと弘法さんが同じ境内に祀っ



牧の三夜さん



牧の弘法さん

てあるのではないかと思われる。

三夜さんはこの境内の左側の一段高いところに二段組の石の上に高さ1m20cm、下幅47cm、厚さ45cm、上部は幅厚さとも20cmの舟形の帆崎石の上部に直径30cmの円の中を深く彫りこみ蓮華を両手で左

側に持った勢至菩薩を浮き彫りにして菩薩の右肩の後ろには「二十三夜」の上弦の月を見ることができる、あら彫りではあるがすばらしい石仏でいつ頃建立されたのかわからない。

灯籠祭りが旧暦の7月23日に行われる。

境内の右側に弘法さんのお堂があり、昔は子ども達が天気の日は木陰で雨が降るとお堂にかけこみよく遊んでいた。その頃のお堂は（大正9年3月21日建立）平成元年に取り壊され、弘法大師の熱心な信者と地域の人の善意により銅板葺きの立派なお堂に建てかえられている。

21. 牧の金毘羅さん

小深井港の右手バス停の上の山に金毘羅さんを祀つてある。

仏教の金毘羅神（クムビラ）は海神竜王あるいは地神夜叉神王ともいわれ、この神さんは雨乞いや遭難者の願いを聞いてくれると言われている。



牧の金毘羅さん

讃岐の国、香川県琴平町に祀られている金刀毘羅宮と融合して金毘羅大権現となり、この金毘羅信仰は江戸時代のはじめから盛んになり、航海者や漁民、農民のなかに金毘羅講がつくりられた。講金を積み立て講仲間が交互に参詣に行く金毘羅代参もさかんに行われていたがあまり遠いので分神をうけ各地に祀られるようになった。



牧の金毘羅さん登口

ここにも昭和4年3月10日に当時の石材関係、帆船関係の有志が発起人となり、施主原田猛男、世話人光野伊六、江越藤吉、入江平三、杉本林作、城 又一、三池弥八、松永幸八、三池伊平次、石工城末男このような人達で浄財を集め建立されている。

小深井港は天然の良港で昔から帆崎石の積み出し港として栄えたところで、航海の安全を祈り春と秋の祭りには幟が立ち秋の祭りには奉納相撲があり大変賑わったものである。

今は石材の産出も少なく石材の輸送も車に変わり、小深井港も地元の漁船が利用するだけで昔日の賑わいはないが、残っている当時の船舶関係者と漁業関係者の人達でお祀りが続けられている。

22. 牧の太子さん

長里と牧との字境の旧県道わきの石丁場の高台に太子さんをお祀りした山がある。そこには山の神、小白大権現、筆崎大明神「御館山稻荷の分神」奥の高台に柄付きの香炉を持った聖徳太子の石像が祀つてある。

ここの大太子さんは太子講、仲間（牧は石工仲間）が祀ったもので太子講は大工、左官、薦職、屋根葺きなど建築関係の職人や、桶屋、鍛冶職人、木樵、木挽きなどを業とする人々が、聖徳太子を祀り飲



牧の太子さん

食をともにして賃金の協定や仕事についての申し合わせ等をする講なかまの集りである。

聖徳太子がなぜ建築関係や技術者の崇敬を受けるようになったかと言うと女帝推古天皇を補佐し政治に仏教思想をとりいれ政治の改革を図り、さらに仏教を基盤として学問や芸術の振興を図り仏教の興隆につとめ、造寺造仏を奨励し、寺院建立に大きな役割を果たしているので寺院建立と

建築職人との結びつきができたものと思われる。

聖徳太子は用命天皇の皇子として生まれ、20歳で推古女帝の皇太子に立てられ、17条憲法（第一条、和をもって貴しとなす。）の制定、遣隨、遣唐使の派遣、仏教の興隆につくされ、世間虚偽、唯仏是真の遺語を残し推古30年2月22日（622年）に49歳で亡くなっている。

太子講は、正月、5月・9月の22日に行われ、9月は灯篭祭が行われる。

牧の太子さんは、明治44年9月22日に建立され、この石像は島原市三会の石工、谷川徳蔵作と言われている。

山の神は天保2年7月7日（1831年）の刻銘があり、稻荷大明神は大正15年に建立してある。

帆崎石の採掘は江戸時代中頃より、牧の船積みに便利なこの海岸近くに良石を見つけ海岸の近くからだんだん山手の方へ採石が始まつたものと思われる。

23. 牧部落と石丁場

牧部落の発祥は、はつきりしないが堤の上から農場あたりまで丘陵地が広がり、一部の雑木林と原野が続いて牧場としては最適の場所であったろうと思われる。

廃藩置県になるまでこの地が諫早藩の牧場として馬の放牧が行われ、牧の地名がうまれたものと思われる。

その名残として馬見の地名もあり、ゴルフ場から実盛神社下の竹崎街道のそばに多くの馬の墓あとが戦前まで残っていた。

上牧付近は谷あいで、昔は人目にふれず風はあたらず陽あたりがよくきれいな水が湧き、昔の人の生活環境には最適の場ではなかつたろうかと思われる。

牧の氏神は、平家の武将斎藤実盛を部落の守り神として安永2年(1773年)6月に祀ってあり、平家にまつわる人達がここに安住の地をもとめ住つたのではないかと思われる。

この牧地区は昔から農地が少なく石材の産出により大変栄えたところである。

諫早藩がこここの安山岩の良石を産出し鳥居、石垣、橋の用材・石碑・干拓用として地元はもとより帆崎石として特に佐賀方面の干拓



牧の石丁場

工事に昔は帆船、戦後は機帆船、貨車等で運搬していた。

現在は石丁場も大型機械やマイトによる採石に変わり運搬もほとんどトラックになり、いまは諫早湾の大型干拓をはじめ各地の護岸、宅地造成用としてまた近年は碎石の需要がふえている。

柳川が生んだ詩人北原白秋の柳川市にある詩碑の原石も昭和23年に牧の小深井港から積み出した。

この帆崎石の採石の始まりは、佐渡に領土をもち一国の城主であった土佐守武富種家が悪臣にほろぼされ、佐渡をのがれ肥前国小城郡砥川村に穩棲していた。

そのかくれた築城技術者、武富種家の子孫が諫早藩にも抱えられこのような人達が、牧の海岸近くに良石をみつけて採掘し地元の住民もその技術を習得し需要とともに石工もふえ採石業が盛んになり各地に採石が広まったと思われる。

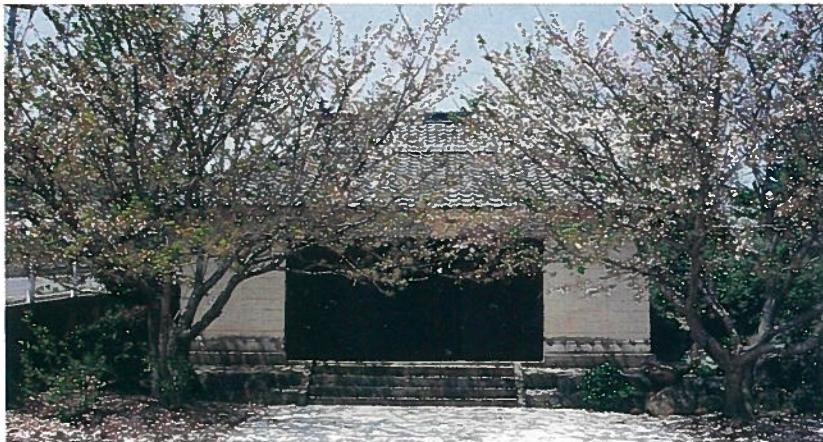
牧の氏神の御神体が帆崎石で石像として彫刻され安永2年（1773年）6月に祀ってあるので、帆崎石の始まりは300年ぐらいさかのぼる事ができるのではないかと思われる。

24. 藤原神社

藤原神社は、小長井駅からみさかえの園方面へ歩いて7～8分の所にある。この神社は部落の氏神として、通称「ダモジンサン」と呼ばれている。これは藤原大明神がなまって発音された呼び方である。

祭神は天孫降臨で活躍されたあの「天児屋根命」である。神話では、天孫降臨と天の石窟戸（天岩戸）の場面で、主要な神として語られている。例えば、卜をしたり、祝詞を申す役などである。天児屋根命が祝詞を唱えたので、その詞の美しさにひかれて日神が岩戸を開けたという伝えもある。

ところで藤原神社の祖先は中臣氏で、この中臣氏の先祖が天児屋根命といわれている。そこで、この中臣氏の中臣といいうのは、神と天子の中を執り持つ役とか、天子と臣下との仲介の役といわれるようになつた。



藤原神社

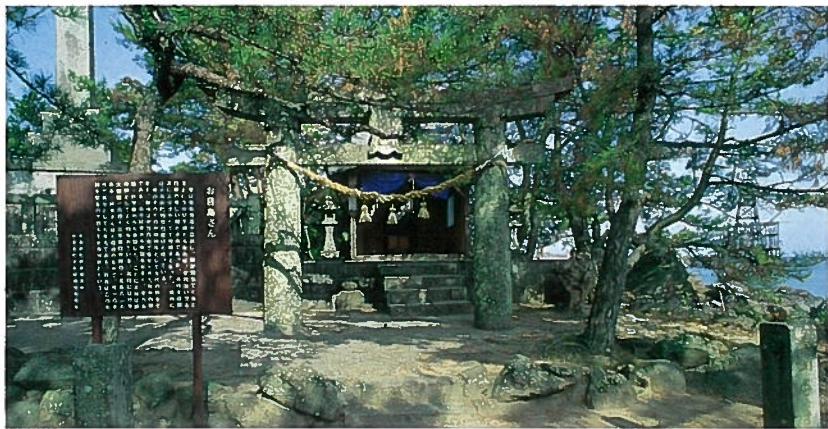
村の先祖の人達は、人々の安泰とそれぞれの将来を占い、みんなの願い事を神へ取り結ぶことのできた藤原氏の先祖「天児屋根命」を祭神として祭るようになったのであろう。

藤原神社は正和5年（1316年）12月1日の創立で、「神まち・神なごり」の祭行事がある。祭神が縁結びの相談で出雲へいかれる10月29日の「神なごり」と、帰ってこられる11月29日の「神まち」である。例祭は毎年12月第2巳日で、巳日相撲も賑やかに行われている。

25. お目島さん

小長井駅の南隣りに、奇石怪石が海岸に露出して老松が生い茂り、この中に目島神社がある。神社の祭神は伊弉円命いざなみのみことを祭り、毎年10月9日に例祭を行っている。

昔は白砂の小島で潮が満ちてくると海上にうかび、干潮ともなれば遠浅の干潟の浜に、シャコ釣りやアサリ採りをした。また、タコ採りなど潮干狩のできた離れ小島であった。その小島も今日では陸続きとなってしまった。明治の文壇にその名をうたわれた森山町出身の前田連山は、諫江八景にこれをあげて、「諫東に名勝ありやと問わば、目島はそのへきとう勢頭第一に数えられるものならんか。蒼々たる有明海の涛、多良の裾野をかみ、鋸齒然たる諫東6里の海岸、漸くつくる



お目島さん

ところ、青松参差たる一団の怪石奇石、忽焉として砂白き海辺をはなれて横たわるあり。世人これを呼んで目島こつえんという。潮来たれば海に浮んで亀の如く、潮去れば海辺に匍匐ほうふくして蝦蟇がまに似たり。老松は梢に彈じて低くうたい、さざなみは巖を摩してながく叫ぶ。あしたにこれをきけば、悲歌慷慨ひかこうかいするが如し。曰くこの島の靈を目島神社といいう、眼病の名医神なり、遠近の善男善女拍手3度して1厘を投じ、1瓶の水薬をあがなうて去る、曰く之を用うれば眼を刺戟すると。俗医の薬に数倍すると。以てその名薬たるを知るべし、何ぞ知らん、海水巖にくだけて泡沫ほうまつとんで花挿中はなそうちゅうの雨水に混じたるものならんとは」……。

お目島さんは岩山そのものが御神体として古代の形をそなえ、石祠には妙見大菩薩、元禄13年（1700年）、陣野・北島と建設者の名が刻まれてある。妙見さんは災厄を防ぎ眼病平癒の神であり、目島はこの女神を祭ることから別名を女島神社ともいわれている。

昔は眼の病がよくなるといって参拝者が多く、神社の境内の臼形石の神水をいただいて眼にさすとなおるといって評判であった。旧暦9月9日の目島さんのお祭りには、佐賀・長崎県下より、竹崎街道を通って参拝する人が島のまわりに門前市をなす有様で、露天商人が立ちならんで賑やかであった。

26. 案山子と田の神さん

はじめに案山子について、一般に人形につくられたものが多いわけだが、毛髪や古布・獣肉を焼いてこれを用いるものもあった。

「かかし」は「嗅し」が語源とされ、異様な臭いを出して害鳥などを追うのがそのはじめといわれている。しかし、人形の案山子は、田の神の依代（神を迎えて祭る時、神が宿る木、石など）として神格観されてきた。

そこで人の姿につくられた案山子について昔、大国主命が出雲の美保崎にいるとき、海を渡ってくる神がいたが、だれもその名を知らなかつた。そのとき久延毘古くえびこが「あれは小名毘古那神すくなひこののかみである。」と言ひあてた。この物語は「古事記」の伝えだが、この久延毘古神は今の案山子のこと、この神は歩けないが天下のことをみな知つてゐる神だと書かれている。

小長井には特別かかし祭はないが、この案山子を依代とする田の神さんとの結びつきは深くかかわりがあるようである。

町内では田の神は小川原浦の上久保に祭られている。この田の神は祖靈的な性格をもつたもので、田圃に降りてきて、田の仕事をする農民の作業を守り、稲の成長を助ける神として祀られている。田の神は稻作の進行にともなって祭られるものであつて、農耕儀礼のほとんどが田の神祭りとも言えるだろう。

田の神はふつう常設の祠堂をもち合わせていないが、小川原浦の田の神は扉つきの石碑があり、石碑には「田神」と刻まれ、文久2年(1862年)12月建立とある。

田の神の祭行事としては、正月や田植えの始まり、田祈祷の時、ま



田の神さん

た春や夏の草かり後などに御酒を供えて祭る。田祈祷や願成就の際は、浮立をして稻の豊作を願うのである。

27. 鎮西（八郎）さん

鎮西（八郎）さんは、小長井駅からみさかえの園方面へ歩いて10分の所にある。

通称「八郎さん」^{みのもとのためとも}は源為朝を祭つてある。源為朝は、為義の8男で人並みにすぐれた武勇を備え、剛弓で目にもとまらぬ速さで矢つぎ早に射ることができた。それにかなうように、左の腕が右より4寸（約12cm）も長かったという。

為朝は幼いころから大胆不敵、親兄弟もなやますひどい乱暴者だった。父の為義も「困った奴だ。これでは親兄弟も迷惑だ。九州にでも追いやって苦労させた方がよかろう。」と、親の手元から出された。為朝はその時わずか13歳であったという。

為朝は野に放された虎であった。まず豊後（大分県）に行って、阿曾三郎忠国の所に入りこみ、近隣の城を攻めていった。こうして13歳の3月から15歳の10月まで、2年あまりの間に大きな戦いを20余り、攻め落とした城は数えきれないほどであった。この若さで身のたけ7尺（2m余）鋭い目つきをして3尺5寸（1m余）の太刀をさし、5人張りの大弓をたずさえ、36の矢をたばねて背おい家来に兜を持たせて、陣頭に立つ武者ぶりはまことにすばらしいものであったと



八郎さん

いう。そして自らを九州の支配者と認め、鎮西八郎為朝と呼ばれた。

しかし、九州の人々から朝廷に訴えられ、朝廷は為朝に「上京してこい」と命じた。しかし、なかなかそれを受けつけなかつた。こうしている間にも、為朝はさらに九州の西部も従えようと白馬にまたがり、手兵をともなつて肥前の国へと進んで行つた。佐世保、波佐見、諫早、野母崎と為朝の剛弓伝説は廻々方々に残つてゐる。

一例では、為朝は諫早の御館山に城を築いた。ここで、多良岳からせめてきた平家の軍勢を迎へうつて矢をいたら、遠くまで飛んで見えなくなつた。あちこち探したら、小豆崎の大岩につきささつてゐた。そこから矢つき崎という名がおこり、今的小豆崎になつたといふ。

その後為朝は平家の軍勢を追つて進軍し、この「八郎さん」の所で駒をとめて一休みした。今は「為朝さんの腰かけ石」も見あたらぬが、石碑のそばには「銀杏」^{いもとう}が大きく上から子供たちの遊ぶ姿を見守つてゐる。

28. 高頭山淨真寺（浄土真宗本願寺派）

当山の御本尊は、一切の衆生を救おうという阿弥陀如来様の立像である。

当山はもと、小川原浦の端に所在し、真言宗の小寺で崇福院と呼ばれていた。筑後柳川に田川数衛といふ武士がいた。菩提心を起こし仏道を求めていたころ、諫早の安勝寺に参詣し阿弥陀様の他力念佛の法を聞き、今まで迷つていた心が開かれて、真言宗を改め浄土真宗の僧となつた。慶長2年（1597年）、法名を端防と称して、浄土真宗興正寺派に改宗するが、後に法名を淨心と改め、淨真寺の開基となる。慶長5年、藩主鍋島勝茂公の仰せにより、本願寺派に転派する。それ以来、朝夕仏願を信じ村中に念佛の教えを広めた。延宝2年（1674年）京都本願寺に願いを出し、淨真寺の寺号の許可を得て代々相続し、現在の住職秀昭師は第14代にあたる。

江戸時代後期の嘉永5年（1852年）7月26日夜、第10代住職西喚師が井崎村の内田瀧馬宅でお務めしていた時、小川原浦が火事とい



淨真寺

う声と共に飛び出し、帰つてみると本堂より出火し、7間4面の本堂と庫裡を全焼する。住職38歳、長男8歳であったと記してある。焼失を免れたものとして現存しているのは、御本尊と延宝6年に本願寺より下付された聖徳太子絵像・7高僧の絵像、それに親鸞聖人御絵伝と天明7年（1787年）からの過去帖である。火災から10年の歳月をかけて、文久2年（1862年）8月に再建された本堂が現在の淨真寺本堂である。

明治26年、寺院莊嚴様式にならって山門を建て、上樓に梵鐘をつるした。大正7年、本願寺九條武子様より仏教婦人会の許可を受ける。大正9年第12代住職亮然師の死去により代務住職洞雲師の入寺となつたが、3ヶ月余りで病床の人となつた。昭和16年12月、第13代住職秀海師の入寺に至るまで、20年間の無住職時の寺院護持は老坊守藤川ツナと坊守チナが引き受けたが困窮の時代であった。

昭和28年1月10日、太平洋戦争中供出した梵鐘を再び鋳造し、門徒全員が盛大にお迎えする。昭和34年、本堂で開設していた保育園が宗教法人ふたば園保育所として認可される。昭和44年5月には、茅葺屋根であった本堂を瓦葺にする改築工事が完成する。昭和58年、嘉永5年の大火の後建築された庫裡を全面改築した門信徒会館が落成し、現在に至る。

境内にはモチの大木が生い茂り、立ち並ぶ庭石も風雅にとみ、眼下には有明海を一望できる環境に恵まれた寺院である。

29. 小川原浦の金比羅さん

金比羅さんは、香川県琴平町の金刀比羅宮を中心とする金比羅權現の信仰として、全国各地にみられる。航海安全の神様で、コンビラは梵語（昔のインドのことば）のクービーラの音訛といわれている。これが仏教では、祈雨や除難の神として祭られた。やがて日本では、漁民の神として海上安全を守るというように考えられて祭られるようになった。

近世になって、香川県の金刀比羅宮までのお参りが遠いので、その代参として金刀比羅宮の分霊をいただき、各村々に金刀比羅信仰として普及していった。しかし、各地に祭られた時期は比較的に新しいようである。

本町では牧の小深井、井崎の松原、築切の猿崎、釜の土井崎と何れも海岸ぞいの突き出た山頂に、海を見下ろす場所に祭られている。小川原浦の場合は、海岸から多少離れているが、眼下に有明海を望む景勝の地に祭つてある。これは、今から約130年程前に建立され、石祠には「金比羅大權現維持、田河忠曉、安政7年次（万延元年1860年のこと）庚申2月吉日」の文字が刻まれている。例祭は3月10日と10月10日と2回行われる。特に10月10日のお祭りには、奉納相撲が盛大に行われ、以前は大変賑わったということである。

金比羅さんのことによく留守番神さんとも言われている。昔話によると、10月の出雲の国での神々の話し合いに、他の神々から出雲行きを誘われた金比羅さんは、とても忙しくて参加できないと断つ



小川原浦の金比羅さん

てしまった。そこで他の神々がいつが一番暇かと聞くと、金比羅さんは、3月10日が一番暇だと答えた。それではと他の神々が3月10日に金比羅さんのもとへ出かけてみると、暇どころか、それはそれは祭りが大賑わいで他の神々はびっくりしてしまった。それから金比羅さんは出雲行きをしなくてもよいことになったそうである。

30. 新田原の一本松さん

新田原のバス停から左前方に「一本松さん」という社がある。これは新田原部落の氏神である。

永禄年間（1558年～1569年）に領主西郷氏の命によって田原溜地が築造されたために、数戸の人々は田原を出て新天地を求めて移り住みここを新田原と名づけた。

新しく村をひらいた人々は、田原神社の祭神である大戸辺命・大年命を分祠してここに社を建てて氏神とし、これを一本松さんと呼んだ。鳥居は平成3年に木造で神名鳥居の形として建立された。例祭は4月8日で、田祈祷や願成就の祭りもあり、昔は浮立も奉納していた。境内には「辨才天辛卯明和8年（1771年）小川原浦村氏子中」の石碑もある。



新田原の一本松さん

祭神の大戸辺命と大年命の二神について、先ず大戸辺命（大斗乃弁神）は古事記や日本書記の神代卷の中に、神世七世の第五代に意富斗能地神（男神）と大斗乃弁神（女神）の対偶神としてその名がみえる。この大戸辺命については多くの説があるが、今の大地が完全にかたまり、人間が住めるよ

うになった時を神格化したものであろう。従って新しく開かれていく新田原の土地を守っていく守護神と考えることができる。

また大年神は素戔鳴尊の御子で、同胞神の宇迦之御魂やごくじょさん「稻荷」と共に穀物の守護神である。

新田原神社の境内には、水神と共に氏神であるこの二神が、新田原の発展と豊かな食料と安住の地を願って祀られたのであろう。

31. 田原神社

祭神は、おおとべのみこと 大戸辺命、おおとしのみこと 大年命。
源頼朝が鎌倉に幕府を開いた、文治2年（1186年）に田原村が開拓され、井崎や小川原浦よりも古い。標高200m位の盆地で、周囲は小高い丘陵にかこまれ、盆地の北側には城山がそび



田原神社

え、南側には広さ約13ha周囲4km余りの、田原溜池は永禄年間（1558～1569年）頃領主西郷氏の命によって築造されたといわれ、北高来郡最大の溜池である。この溜池の中央の景勝地に一字を創建して鎮座した。溜池築造のため、社殿を北山弥次郎の景勝の地に遷座した。その後数年して悪疫流行したため、村民深く畏れ、天正3年（1575年）更に堤の中央に、531.53m²を埋築して一字をもうけ遷座式を行った。今の社殿がこれで田原の氏神様である。溜池の水が引くと階段の前方に丸い1m程の大石が2個ならんでいる。これは溜池を作る前の鳥居の跡形といわれている。鳥居は元禄2年（1689年）の建立である。祭典、例祭は旧暦12月8日であったが、現在正月8日に行われ、初祈祷、八日祭田祈祷、願成就などが行われる。氏子は田原一円の人達である。

32. 田原溜池と辯財天

小長井町のほぼ中央に位置する田原盆地は、標高約200m、周囲を標高約250m余の丘陵に囲まれた静かな集落である。盆地中央部に、周囲4km余の北高地域で最大の溜池がある。室町時代（1467～1568年）頃までは、井崎、小川原浦は今のような集落はなく、丘陵はほとんど雑木林で、谷間に少しばかりの泉がわき出でていて、そこにいくつかの人家があるという状態で、10日間も日照りが続くと、わずかばかりの水田も干害にあい大きな集落の発達は望めなかつた。戦国時代の領主西郷氏は、打続く戦乱の中にあっても代々民政につとめ、農業の振興に力を尽くした。井崎、小川原浦一帯の農民が貧乏なうえ、人口が少ないのを見て、両村の上流田原盆地に溜池を建設して、下流一帯の山林原野を水田にしたら、米麦の生産は数倍し、人口はたちどころに増加すると考えた。しかし周囲4km、面積14haの水没予定地には、平安末期から文治年間（1185～89年）に田原村を開墾して、以来370年余の間、住なれた数戸の人家があった。先祖代々村づくりに励んできた土地を捨てて他所に移ることは、農民達にとっては最も耐えがたいことだった。役人や庄屋たちが熱心に説得してもなかなか聞き入れないので、最後の手段として宝池院（西円寺）に一人一人を呼び出して、屏風のかけでは武士たちが刀の



辯財天

緒をとき、白刃をのぞかせて庄屋に説得させ、むりやりに誓約書に血判をおさせ、やっと落着したということである。移転先はふもとの広々とした丘

の上で新しい田畠を十分もらって移り住み、この地を新田原と名づけた。

辯財天は、田原溜池の御祭神として溜池の西方の、小高い丘に祭られてあったが、明治18年頃溜池放水路土俵堰問題がおこり、南田166番地にあった堤の神様御身体は、堤防の上え明治32年頃移転し、鳥居は其の場所に倒してあったので、平成3年6月南田より、現在地の向平99番地堤防の上に移転、90余年ぶりに立派に再建された。

いいもり しろやまじょうあと
33. 飯盛神社と城山城跡

県道小長井線田原入口バス停より約80m先に飯盛神社、城山城跡の標柱がある、山手50m程の所に飯盛神社の鳥居が見える。元禄13年(1700年)の建立である。参道の石段は大正中期木下吉之丞翁が開拓事業をされる頃、部落の青年の手で作られた。御祭神は三社大権現(釈迦、弥陀、観音)で白虎隊を祭る。福島県の飯盛神社の御分霊も合祀しており、地元では権現様とも呼ぶ。昭和13年4月3日石祠を建てて御神体を御祀りし、拝殿は昭和13年に解体した。(木像4体は田原神社に合祀した。)御祭りは7月15日祇園祭、10月17日宮日祭がおこなわれる。

城山は標高282mで飯盛神社の石祠から約45m程のぼると、東側に空堀の跡がある、幅3.5m高さ山手の方が3m、長さ40mは現在もくぼんでいるが総延長は、80m堀った跡形がある。空堀から25mのぼると頂上につく。北側は自然石で高さ平均2m積んであり、西側は土羽で、南側は32年水害後の石丁場跡である。頂上は南北80m東西70m南が高く、北が低い広場で、北西側に5m間隔に土羽積みした箇所があり、城跡と思われる石がならべてあり、その中にところど



飯盛神社



城山城跡

ころ助石の跡がある。永禄末期（1568年信長全盛の頃）、田原城主
がこの城山を築き、地方豪族として栄え、遠竹の権現岳城主と追い
つ追われつして互いに、その勢力を争ったといい伝えられ、北側の谷
を（ういど）と呼び城に使った大井戸の跡ではないかといわれている。

34. 仏石

場所は県道小長井線仏石バス停横にある。田原に溜池ができるとき、数戸の人々はやむなく、今の新田原に移住した。この人々はお寺が遠くなつて寺参りに不便を感じ、お寺を自分たちの所へうつしてくれとせがんだ。移住の犠牲をしいられて、新開地に引っ越しした



仏石

人たちの、心根を思うと、可愛ううなので部落の者と話合って、西円寺住職が阿弥陀さまを背おって、田原部落をあとに新田原の方へくだつていった。丁度今の場所にきて、道端の大石に腰をおろして休み、しばらくして腰をあげようとすると、どうしたことか仏様が重くて、石からはなれない。住職は不思議に思って、四苦八苦したがどうにもならない。それではもとの田原に引き返そうと、足をむけると急に軽くなり、やすやすと歩けるようになった。住職は「さては仏様はものとの場所が、有縁の地としてとどまりたいのであろう」と、田原のもとの古巣え、引返したという、里人はここを仏石と云い伝えている。町文化財保護審議会発足に依り、再建する事になり昭和62年10月5日入魂式を終え後世に伝える。

35. 木下吉之丞翁

大正の初めから我が国は極度の食料不足になやまされた、翁はこれを憂えて田原、長里の山林原野250余haを、国費補助並に、長崎農工銀行の資金融資により買収、開墾に志した、茶屋溜池、山神溜池の建設にとりかかり、字清水、天堤、長坂、木裏木、立石等の高原を開拓して100余haの水田をひらいた。ここに福岡、佐賀地区からの農家を移住し、道路を整備し、学校を建て新農村建設に全力を



木下吉之丞翁碑

つくした。こうして30数戸の農家の入植ができた。将来は200戸以上の大農場を夢みて、身をささげ努力されたが竣工半ばにして、昭和4年7月12日、71才を一期として長逝された。その後昭和5年7月18日の台風により家屋は倒壊し多大の被害を受けた。新農村の将来を夢みて入植された30数戸も台風で家はとび、出来あがった校舎も倒れ、入植者は次々と故郷へと引きあげて行った。その頃残務整理の為に早川貢さんが来られ、茶屋や山神溜池の記念碑は昭和2年に建立した。その後、武藤氏、野中久子氏と引継がれたが終戦になり、政府は緊急開拓事業を取りあげ、農地改革により地主の土地所有制度を廃棄し、農林省がもとの木下農場（長里耕地整理組合跡地）250余haを買いあげ清水23戸、農場13戸、増反者45戸が農林省より引揚者や、復員者の入植開拓用地として売り渡され、清水農場部落として、木下翁の夢は立派に実現した。

36.宝池山西圓寺（浄土真宗本願寺派）

諫早の西村助左衛門高美という武士が菩提心を起こして真宗に帰依し、紀州の鷺の森、本願寺にて、得度して正山の法名を授かった。その後自分の支配地、田原村に移り真言宗の末庵宝池院を、多良岳金泉寺から五両で買い受け、これを改築して宝池山西圓寺と改名し、



宝池山西圓寺

当寺の開基となった。時は天正8年（1580年）11月3日であった。寛永16年（1639年）2月に寺院境内、東側の山林30aを寛永銭5貫文で、ゆずり受けて境内にし翌年3月寺院を新築移転した。本尊は阿弥陀如来の立像である。その間第3世正順師は京都の本願寺に立願して、木仏尊像影像ならびに寺号をいただいた。昭和47年3月門信徒有志の発起によって、102戸分の遺骨を収納する納骨堂が境内の一隅に建てられた。昭和57年本堂も門信徒の発起で、茅葺屋根を瓦葺に改築、庫裡も昭和61年に新築され現在立派な偉容を見せている。第15代山口文雄師が住職である。

37. 山茶花の茶屋

標高350m余りで山茶花峠と呼ばれている。この西側の地名を水茶屋といい、東側を山茶花という。里人はここを茶屋とよんでいる。元亀2年（1571年）ポルトガル船が長崎に入港してから、南蛮貿易港として長崎が栄えたが、豊臣秀吉が天正15年（1587年）九州征伐の折、長崎が宣教師領になつてゐるのをみて、ポルトガル人から長崎を奪かんして、公領とし宣教師を追放した。江戸時代になつても切支丹を禁止したが、寛永14年（1637年）に圧政と圧迫にたえかねた宗徒たちによって、島原の乱がおこつた。その後家光の時、長崎



山茶花の茶屋

に出島をきずいて、ポルトガル船の通商を禁じ、平戸のオランダ人をここにうつした。日本の対外貿易を長崎だけにし、オランダ人と、中国人に貿易をゆるしたが、寛永18年（1641）幕府は長崎の防衛に注意し、福岡の黒田と佐賀の鍋島と交代で、その警護にあたらせた。黒田氏は長崎の行き帰りは長崎街道嬉野まわりを通ったが、鍋島氏は専ら多良街道を通った。沢山の家来をつれてこの街道をのぼりくだりしたさい、茶屋にかごをとめて休憩し、そのかご立場がここにあつた、4m四方ぐらいの、しっくいの台をつくりその上にかごを置いた。この西隣の茶店の庭に紅色の山茶花の大木があつて、旅人の目をなぐさめたので、山茶花の茶屋という名がついた。旅人が米の粉で作った餅や、山芋のトロロ汁に舌づつみをうつて、出発に笠を忘れた唄がある。笠を忘れた、山茶花の茶屋に、ザーンザ・ザンサ・空がくもれば、思い出す、色者の粹者で、氣はざんざ、アラヨーイ。ヨイヨイ・ヨーイ・ヨイヨイ。

38. 山茶花の神さん

旧多良街道茶屋入口から、山茶花高原へのぼる少し右上のみちばたに觀音さんを中心に、松浦大明神、文政10年（1827年）、クメの權現、元治元年（1864年）の銘が刻んである。昔は雨が降らないとよく雨乞いをしたものである。遠竹の人達が多良嶽神社にのぼり、雨乞いをする時には、この神社に立寄って、浮立を奉納して祈願したものである。お祭りは8月17日。



山茶花の神さん

39. 境界標柱

徳川幕府は寛永18年（1641年）佐賀（肥前）鍋島藩と、福岡（筑

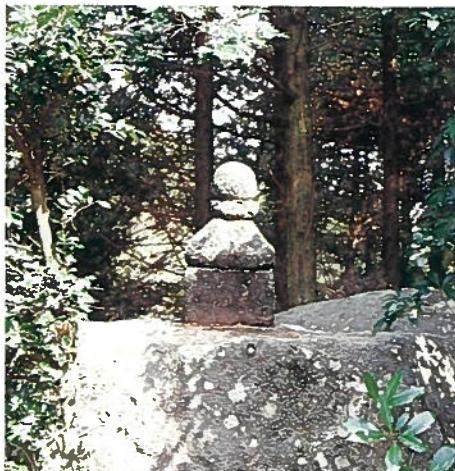
前) 黒田藩に、1年交代で長崎港の警備を命じた。黒田藩は嬉野まわり長崎街道を通った。鍋島藩は、開国後の元治元年(1864) 7月発止になるまで、223年間多良街道を通った。明治2年6月(1869) 長崎府が廃止され、長崎県となり、明治4年9月厳原県と伊万里県が合併、同年11月平戸、大村、島原、福江、の各県が長崎県に合併、これを廢藩置縣とよんだ。その後明治9年佐賀の三瀬郡に合併されると、松浦、杵島両郡は5月24日に、藤津郡は6月21日長崎県に合併、同年8月21日三瀬郡は廃止、元の長崎県全部を長崎県管下に移された。諫早をふくむ北高全体を「高来郡」と称しており、南北の両高来郡に分割されたのは明治11年であった。高さ2m位、幅25cmの角石に、「是從、北、藤津郡之内田古里村、南、高来郡之内遠竹村」と刻んである。明治初年ごろの建立であろう。



境界標柱

40. 稚児の塔

天文19年(1550年)ザビエルが鹿児島に渡来してから20余年になり、大村や島原方面では、キリスト教信徒が数万人にも及び、非常な勢いで広がった。また永禄5年(1562年)ポルトガル船が西彼杵郡瀬川の横瀬の浦に来航、アルメイダという宣教師が乗船し、時の大村領主に面接し、キリスト教を勧誘した。純忠公も快く受け入れ



稚児の塔

洗礼を受け転宗した。それ以来大村領内は、急速にキリスト教が普及し、諫早領では長崎、古賀、田結方面にもキリスト教が盛んになり、一神教といつて神以外を信ずる宗徒たちに対して、天火といつて盛んに神社や、お寺を焼討ちした、西明寺や雲仙の満明寺も焼かれ、今度は金泉寺を焼くというので舜恵法印住職は、外の9名と詰合ひ数百年も続いた伽藍を後に、御本尊を背負い、大切な品々は従う坊さんが運び出し、険しい山坂を東えとくだつた。その一行の中に八才にも満たぬ西宏と云う稚児がいた。一昨年春寺に入った利発な愛きょうのいい子で、皆からかわいがられていたが、昨夜からの腹痛で爺やが背負い、帆柱岳の南、三番多良をくだる頃から激痛に耐えかね歯をくいしばり、眼をつりあげて身体をくねりはじめたので、背からおろし路傍で介抱したが「お師匠さま」と呼んで、後は答えがなかつた。稚児の枕元に桔梗の花を捧げ、心行くまでお経をあげた。あのかわいいやさしい稚児の西宏が、すすきの中からほほえんでいる。昭和32年水害復旧により場所が少し移動し、植林地のみちばたに安座してある。

41. 淀姫神社

部落を一望する小高い岡に鎮座する井崎部落の氏神である。

神社庁登記簿記載記録によれば「御勤請由緒、祭神、淀姫之命、詳しかならざれども延慶元年(1308年)9月29日小祠

を創立、現在の正殿は天保7年9月、拝殿は天保9年4月再建、昭和9年1月新築その後多少の修繕を加えたり、中略…明治7年5月村社に列せらる。」と記録されている。

この記録から見る限りかなり古きにさかのぼる、創立とされる延



淀姫神社



慶年間は鎌倉時代末期頃に当り約680年前である。

正殿は天保7年（1836年）とある事から約160年前の建築であり精巧に刻まれた二対の懸狛犬や龍の彫刻は社の格調と共に当時の氏子達の敬心を偲ばせる美事なもの

であり訪れる人々の驚歎を誘う。又社前の鳥居は享保5年（1720年）12月井崎村の銘が刻まれてあり約270年前の奉建である。

例祭は10月17日古式ゆかしい神楽舞が奉納され、その他元旦祭に始まり初祈祷（的射）田祈祷、願成就、神待ちなどの神事が年間行事として執り行われている。

42. 井崎の金比羅さん

金比羅さんは海の守護神航海安全の守り神として信仰され町内各所に祀られている。

井崎の金比羅さんは井崎地区の地籍地番の起点ともなっている旗保子松原の高台に祀られている。

境内には四国の金比羅宮の分神として自然石に彫刻された石碑を海に向けて建立されている。関係者の話しによれば大正3年創建と共に建立されたものと言われる。

昔から佐賀地方の干拓事業を始め河川工事用として町内産の石材が盛んに使用されて來たが、その輸送機関として多くの機帆船が利用されていた。昭和40年頃までは井崎地区だけでも20数隻いたと言われる。その後は自動車の普及により輸送機関もトラックによる陸上輸送に変り、現在では殆んどと



井崎の金比羅さん

言ってよい程になってしまった。

最近では元の船舶関係の人や漁業関係の人々により祭り事が続けられている。お祭りは旧暦で春3月10日、秋10月10日の2回行われているが以前は奉納相撲が行われ近郷近在の名力士が集まり大変なにぎわいを見せていたのが最近では祭り事だけが執り行われている。

境内中央に八角形の塔が建立されているが、金比羅宮創建70周年と境内の再整備を記念して建立されたものである。

43. 皎月坊

平安時代初期弘法大師が諸国布教の際竹崎に上陸されすでに創建されていた観音寺を真言宗に改宗、更に多良岳に登り金泉寺を建立、不動明王を刻んで本尊とし、山岳信仰の靈

場として真言宗の布教につとめられ、この地方一帯の信仰を深められたと言われる。

西円寺や淨真寺、稱念寺も一時期ではあったがその末寺であったとも言われている。それほど当時は真言宗の信仰が深く民衆の中に浸透していったものと思われる。

その頃井崎にも布教信仰の寄りどころとして庵寺が建てられ里人の信仰を深めていったと言われ、現在残る皎月坊はその由来に基づくものと伝えられている。

現在のお堂は昭和の始めの痛みがひどくなっていたのを古賀家の好意により建て替えられたもので、堂内には本尊として彫まれたと思われる古い2体の木造仏、その両脇には数体の石仏が安置されて



皎月坊

いていかにも千年の重みを感じる坊である。

戦前までは毎年8月23日には近郷の信者達が集り千灯籠を灯しにぎやかにお祭りが行われていたが、現在では信者も少なくなり千灯籠を始め昔を偲ばせる行事もとだえているが近所の人々により堂守りがなされ田祈祷、願成就祭には必ず浮立の奉納が続けられている。

44. 井崎の觀音さん

一般に觀音様と言うのは觀自在菩薩と言うのが正しい呼び名である。觀自在とは総ての生き物の世界をよく観察して悩み苦しむものを救済する菩薩であると言われている。

菩薩とは如来の前の段階の位であり十一面觀音、千手觀音、馬頭觀音、子安觀音などの呼び名で総ての衆生の悩み苦しみを救い導いて下さる有難い觀音様と言われている。

井崎の觀音さんは部落の中央築切部落えの道路分岐点にお堂が建っている。子安觀音とも言われ子供が誕生すると無病息災とその成長を願って、仏像に胸当てを奉納したり、また子供の好きな觀音様とも言われ、堂で遊んでいても怪我をしないとも言われ、親しまれている觀音様である。

お祭りは毎年8月17日部落の青年団の行事として受け継がれ行われている。当日は夕方から千灯籠を灯し、浮立なども奉納されたり



井崎の觀音さん

夜おそくまで参詣人でにぎわいを見せる。

45. 中道の龍宮さん

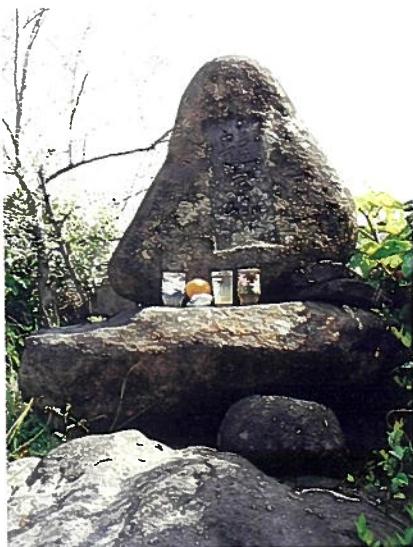
龍宮さんとは海を静め雲を呼び雨を降らすと言われている次の八体の龍王の事でこの八体の龍王を総合して龍神、龍宮さんと呼ばれているものである。

なんだ 難陀龍王	ばつなんだ 跋難陀龍王
しゃがら 沙竭羅龍王	わしうきち 和修吉龍王
とくしゃか 徳又迦龍王	あなばた 阿那婆多龍王
まなし 摩那斯龍王	うはつら 優鉢羅龍王

この八体の龍王は海に住むと言われている事から龍宮城の事を連想され勝ちであるがそうではなく海上の安全と、雲を呼び雨を降らせて五穀豊穫をもたらす龍神として祀り、崇拝されているものである。

我が国では江戸時代よりいたる所で開墾や干拓事業が行われてきた。参勤交代等で藩財政が苦しくなり、その財政立直しのため実施されたもので諫早藩でも藩の直営或は郷村の事業として、或は又富豪の私財等によって実施されてきた。特に江戸中期から明治初期にかけて盛んだったと言われる。

町内にも3ヵ所の干拓地があるが築切の柳新田は徳川初期（寛永年間）諫早藩の直営事業として実施されている。長里新開は島原の中尾忠吾と言う人が私財を投げうって明治16年から3年がかりで完成させたと記録にある。井崎の中道干拓については施行年代や施設主共に不明であるがどこの干拓地を見ても龍神が祀られている。稻作を始め五穀豊穫を願う農民のささやかな祈りを込めて建立され崇拝されて来たものであろう。



中道の龍宮さん

井崎には中道と上船津の2ヵ所に祀られていたが、上船津の龍宮さんは境川の河口岸にあったため、昭和32年の諫早大水害の際流失してしまった。現存する中道の龍宮さんは昭和2年の大型台風により堤防が決壊し、村営事業として翌年の秋復旧されているが現在の石碑には昭和6年10月9日再建と記されている。古者の話では以前からの碑はその時の台風で流失し再建されたものと言う。

祭は毎年11月11日耕作者により執り行われておりまた田祈祷、願成就には必ず浮立も奉納されている。

46. 坂下の馬頭観音

坂下部落にはいる三叉路から50m程行った林の中に小さなお堂と古めかしいお墓が安置されており地元ではここを馬頭観音さんと呼んで供養を続けている。この馬頭観音には遠竹の鶴田遠江守にまつわる物語りが伝えられている。天正の昔と言えば京畿では天下統一をかけ織田信長を筆頭に群雄割拠して戦乱に明け暮れる戦国の世、地方においても又大なり小なりの戦いが繰り返えされていた。遠江守が或る合戦の折形勢不利となり危なくなつた時家臣の一人が、遠江守の鎧兜を身にまとい主君の愛馬にまたがりその身代りとなつて奮戦の末、主君の無事を祈りながら力盡きて討死した。

遠江守は家臣の咄嗟の気転によりかろうじてこの場を脱出権現岳城え落ちのびる事が出来たと言う。身代わりとも知らず敵



坂下の馬頭観音

軍は大将を討ち取ったと意氣揚々として引き揚げて行った。生き残った遠江兵は身代りとなった忠臣と愛馬をこの地に葬り墓石を建てて手厚く弔いをして引き揚げて行った。

後日遠江守はその靈を弔おうと家臣に命じて墓石を持ち帰ろうとしたがどうしても動かす事が出来なかつた。さては此の地を安樂往生の地と定めているにちがいないと持ち帰る事をあきらめ、小さな堂を建て馬頭観音像を安置してその靈を弔つたと言う事である。

今も古めかしい2基の墓石が残つており、一つを殿の墓（愛馬）一つを別当の墓（家臣）と言って地元の人達により毎年その命日とされる8月17日には灯籠や香華を供えて供養が続けられている。

47. 築切の觀音さん

もともと柳新田の樋門の手前の高台に鎮座されていたものだが、昭和47年8月国道207号線の改良工事に伴い現在の猿崎の岡に移転されたものである。

四方の眺望に恵まれ北側には多良岳や毘沙天岳、前方は有明海、雲仙岳を望む風光明媚な場所にあり、広々とした敷地は地元の人の寄徳によるもので、築切部落の遊園地としても利用されるなど幅広く親しまれている。

鉄骨モルタル造りの堂内中央には千手觀世音菩薩の木像を祀り左



築切の觀音さん

手には石像の弘法大師、右手には不動明王の石像が安置され境内の左側に金比羅宮、八天宮、天満宮が祀られ右側には馬頭観音の石像が安置されている。

お祭りは毎年8月21日青年団の行事として行われ千灯籠を灯し賑わいを見せる。

又正月4日には部落民総出により、お堂の外に祀る五体の神仏と、柳新田の潮止めを記念したお祭りが恒例行事として執り行われている。

48. 諏訪神社と境内の神々

諏訪神社は遠竹名一円の氏神様で慶長5年（1600年）関ヶ原の戦いの頃創立された。何回かの改築により現在の神殿、拝殿、御堂となり、祭神は大国主命の御子、健名方神たけみなかたのかみ、健名方富神たけみなかたとみのかみである。下段両側には木像の弥五郎さんが座している。祭は遠竹の宮日10月19日秋祭りを兼ね浮立を奉納する。

境内の左側には自然石に天照皇大神宮ときざまれた石が祀られている土台に宝暦5年（1755年）とある。右側石垣の上の境内には天神さん、八天宮さん、権現さんが祀られてある。これ等の神々は明治の初期合祀したものである。天神さんは諏訪神社の西方、あざ字野川のとん やま（通称殿の山）のふもとの天神山より、八天宮さんは多良原（二反辻）



諏訪神社

から、権現さんは権現岳頂上より寄せられたという。
お祭りは本村部落の人達によって8月24日他の神々も兼ね天神さん
の千灯籠としておこなわれている。

49. 権現岳城址

遠竹本村と南平部落の中間に標高102mの権現岳がある。この山を荫るように北から東へ遠竹川が、南から東へ南平川^{みなんびら}が谷をなして流れ、西は野川（殿の山）^{とん}の山裾に連なり天然の要塞をなしている。山の頂上は平坦で、この地方を支配した鶴田遠江守の居城があつた。山の9合目当たりには空掘りの跡があり、頂上にはすけ石と思われる石が点々と見受けられる。遠江守は一朝事ある時はこの城に立てこもり防戦した。遠江守は竹崎城主北島藤左エ門に攻められ権現岳城に立てこもり、前方二反辻に陣取った敵とにらみあっていた。しかし、水源をたたれ敵に弱みを見せまいと馬の背に白米をかけ、いかにも水がある様に見せかけて防戦したが力およびついに敗れて一族討死したという。時は天正10年（1582年）その後権現岳城も共に朽ちはてたのか知る人もない。



権現岳城趾

50. 八坂神社（祇園さん）

八坂神社は遠竹本村の西南にそびえる鶴田遠江守の居城のあった権現岳中腹に祀られている。本村より南平方面へ100m程も行けば右手に丸木造りの鳥井に八坂神社とある。山石をならべた石段を登りつめると境内右手にやまももの古木があつたが平成3年の台風によって倒れ、何かものたりなさを感じる。正面の石垣の上に祠がたち、中に牛頭天王、観音開きの扉に宝暦12年（1762年）と彫りこんである。祭神は須佐之男命で除災の神としてあがめられている。例祭は7月15日で前夜は本村住民により千灯籠祭が行われる。戦前は多数の出店等も出て相当の賑わいであったときく、最近迄は出店等もなくさびしい千灯籠祭りであったが4～5年前より地元若者（わらび会）等によって金魚すくいや、水玉風船等を出し参詣者が多くなっている。翌15日は遠竹一円の氏子が参詣し神事の後境内において御神酒をくみかわし雑談で親交を深める。



八坂神社

この境内にはこの森だけで鳴くと言ひ伝えられる蝉がいて1匹の頭と思われる蝉が「じーいー」と鳴けば森のあちこちから一斉に鳴きはじめる（約30秒から1分位）、しばらくして又鳴くというめずらしい蝉である。地元ではこの蝉を祇園蝉とよんでいる。

51. 阿弥陀如来と阿弥陀崎

肥前の国、伊佐早の西郷純堯の頃（室町時代の末期、永禄・元亀1558～1572年）伊佐早の周辺は、宗教戦が始まっていた。それは西郷氏の仏教保護に対して、伊佐早周辺のキリストン宗徒による仏像・仏器の破壊という寺社受難の時代がつづいていた。



阿弥陀如来

天正の頃となり、時の政策によってキリスト教禁制の令がだされた。天正15年（1587年）秀吉、バテレン追放令を発令、天正17年（1589年）秀吉、ヤソ教を禁じ、その命を受けた高僧達が、布教伝導のために肥前の国、長崎へ向かった。

布教伝承のための道のりは、有明海沿いと大村方面との両方に分れて行われた。この高僧の中に、下総の国（千葉県）からきた僧侶（玄貞和尚）がいた。

た。この僧侶が後に誓願寺を建てた開山上人であった。

上人は有明海沿いを布教して長崎から帰る途中、たまたま遠竹村の釜の地えさしかかった。ところが釜の地では、漁師達が大変騒いでいたので上人が事情を聞かれた。漁師の話によると、近くの海の中から不思議な光が出るということであった。この話を聞かれた上人は、早速漁師に不思議な光めがけて網をうたせ、引き上げてみると、なんと1m80cmもある阿弥陀如来の靈像であった。

上人はしばらく釜の地にとどまり、靈像を鶴田遠江守の菩堤寺である金胎寺に一時安置した。

布教伝導の途中で、帰らねばならなかつた上人は、いよいよ釜の地を出発するその前夜の事であった。「東の方へ旅立ちたい。」と上人の夢枕に靈像が立たれた。そこで上人は阿弥陀如来の有縁の地を求めて、釜の人達の手伝いをうけて、再びもとの道を上って糸岐まで行った。

糸岐でしばらく休んで再び靈像を動かそうとしたところ、今度は靈像が大変重くなつて運ぶことができなくなつた。そこで上人は、この地を有縁の地として諫早公（糸岐まで諫早藩）に願い出て、寄進をうけて誓願寺を建立した。時に慶長2年（1597年）の事であった。

遠竹村の釜の地は、釜の港の東側に奇岩怪石が重なりあい長く海上に突き出て、古い木立にかこまれ、櫻の大木もあった場所を阿弥陀

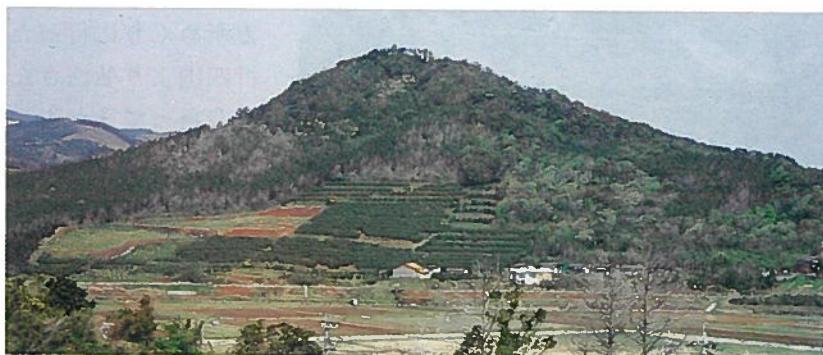
崎と呼んだ。それが国道207号線の開通によって、海岸も大半けずりとられてしまった。そこで釜部落の人達は、阿弥陀さんの縁起を伝えるため、その跡地にコンクリートの祠を建てた。阿弥陀如来像の出現の地、釜に記念として石仏を建てて阿弥陀崎と呼ぶようになり、毎年1月15日には盛大な祭りを行っている。釜に居住する檀徒は、当時の子孫である。

誓願寺の阿弥陀如来様は、仏師の話によれば、仏像の材質は日本産の木ではないということである。昔、仏像が国外から船で運ばれてきた頃、嵐で船が転覆して仏像が潮の流れにのり、釜に着いたものであろうと思われる。

52. 麻沙天岳

遠竹小学校前の町道黒仁田線を300m位登れば左側に麻沙天岳入口がある。麻沙天岳（161m）頂上には石を積上げ（1m30cm位）その上に麻沙天さんが祭祀されている。天正8年（1580年）頃の建立である。

福田健一氏は（柳谷出身）この地を遠竹の名所にしようと2番岳頂上に、有明海航行の安全もふくめ昭和6年金比羅さんを建立した。運搬に当っては「スラ」道を作り引きあげたという。途中道わきにも数々の神仏を建てた後これを参道となし両側には櫻を植え生涯を麻沙天岳に捧げられたと云う。一時は花見を兼ねた参詣者で賑わい



麻沙天岳

をみせたが福田氏没後は参道も荒れはて櫻も雑木に押され大半が枯れ、頂上付近に数本の古木が面影をのこしているのみである。

地元では福田氏の偉業を再現しようと公園化を計画、町に請願、広大な土地（80a有余）は地権者の寄贈により平成元年より3ヵ年計画によって立派な公園が出来あがつた。参道は拡復舗装され、園内、参道両側には櫻、つつじを植樹、1番岳頂上には展望台が建ちそこからの眺望は又格別である。将来は山茶花高原との観光ルートも計画されている。

石像仏の彫刻は糸山与一氏の作である。

毘沙天岳の彫刻物はいうに及ばず、釜の阿弥陀如来石仏、鹿島祐徳稻荷神社の狛犬等も刻まれている。

53. 柳南の弘法さん

国道207号線より遠竹名釜部落に入り町道黒仁田線を約2km位登れば交叉路にでる。右に入れば南平、遠竹本村方面、左に下れば柳谷部落、その右角に2間四方の新しい御堂（老朽化のため昭和59年新築）がある。柳南の氏神弘法さんを祭祀してある。平安時代の頃空海は竹崎を経て多良岳に登り金泉寺を創建し、この地方に真言宗を広めた。後に弘法大師とあがめられ各地に祭祀されてある。お大師さんと呼ばれ親しまれている。柳南の弘法さんは天保5年（1834年）頃より祀られているものと思われる。



柳南の弘法さん

昔、四国の八十八ヶ所めぐりに行った折四国より弘法さんを背負ってきたものといわれている。

例祭は4月21日柳南の人総出で近郷からの参詣者を接待し、夜おそらくまで賑わう。

54. 黒仁田の毘沙天さん

黒仁田の氏神様は部落の南西の山、毘沙天さんに祀られてある。

急な坂道を300m位登れば広々とした森の中央付近に石を積上げた上に祠が建ち、中には辯才天、元禄16年（1703年）12月とある。例祭は11月26日で本通（祭元）^{ほんつう} 通人（つうじん）（加勢人手伝い）によって本通の家で準備をする。餅を搗き神前に供え、中学生以下の子どもを集め餅投げをする風習が今も続けられている。夜は祭元の家に集り来年の本通、通人を籤引き^{くじ引き}によって決める。その後夜おそく迄祭りさわぎである。

本通に籤が当ればその家の1年中の不幸は神様が守って下さる。子どものいない家庭には籤運がないと言い伝えられている。

黒仁田発祥は深海の蓮行寺住職の弟になる人が門徒数名を連れ入植されたのがはじまりといわれている。弁才天も入植者が建立したのであらうという。その関係で部落の人ほとんどが蓮行寺門徒であった。



黒仁田の毘沙天さん

55. 粟踏浮立

遠竹の釜バス停から2km、権現岳城の北側に鶴田遠江守の菩提寺金胎寺があった。この金胎寺も遠江守の滅亡と共に荒れはてたので、その後2間（3.64m）四方の観音堂を建てた。粟踏浮立は、この観音堂と遠江守の墓地との間の広場で行われる。

毎年盆の16日には遠竹名部落民が集まって、まず遠江守から氏神の諏訪神社へと浮立を奉納する。粟踏浮立は遠江守の墓前にだけ奉納するが、その起源については不明である。この広場は「トンノヤシキ」といって遠江守の墓前だといわれ、旧暦の盆の16日がその命

日といわれている。この日はどんな雨の日も浮立をしないと凶年になるというので、浮立を欠かしたことがない。

粟ふみをする子どもは6才前後から10才前後の男子を12月にちなんで12名を選び、6人ずつ前後2列に並べる。

頭に豆しばりの手拭いをして5色の七夕紙の御弊をもって、互に並んで畠の中の粟だねを踏む格好で、笛の曲にあわせて右に左にと威勢よくおし合いこれをくりかえす。部落の長老が須古踊りの唄を謡風にとなえると粟ふむ調子もはやくなる。男子の数は潤年には13名になる。唄の文句はかな書きで、その意味は不明だが次の通りになっている。

○ねぶられぬ者は、そのいをまぐれ待つ夜も、ふらぬしぐれに袖し
ばる。

かさかなこひの、もらざるに、そらあおうらめしや、ちよたち川
に、雨ふらば雨ふらば。

○浮世にすまば、にこつ君様にこつ君様。

○目出度き御代の始めかな。わかとのがこうなされて、国重なりて
御代久かれ、御代久かれ。

○千代に八千代と、千代重なりて、御代久かれ、御代久かれ。

○かきやる文を、たたいたつに、見わけて戻す人ぞ、うらめし、う
らめし。

○怨みても我に逢う夜の、文玉章たまぎを、中で留むる人ぞ、うらめし、
うらめし。

○うつつな人の心や、我は思へどそなたこそ、わしきの葉の露ふり
しや、しとしと。

○武藏の原の1本すすき、いつか穂が出て、みだれあふ、みだれあふ。



粟踏浮立

これが栗踏浮立の唄で、須古踊唄であるといっている。

遠江守が戦に敗れて、佐賀の須古村に逃れたという伝説もある。須古村はその後天正2年（1574年）竜造寺隆信によって須古妻木城主平井一族は、諫早大村に逃れた。その一族の人達が遠竹村に又落ちてきて、故郷の須古をしのぶ祖先供養の気持ちから子孫に伝えたものであろう。そして遠江守の墓前で供養されてきたことが、小長井町でも遠竹だけが数百年後まで、原型をくずさず残されてきた理由であろう。

56. 社会福祉法人聖家族会 みさかえの園

昭和24年創立された聖母の騎士修道女会の10周年記念事業として始められた精簿児施設みさかえの園めぐみの家が開園されたのが昭和36年5月である。同年11月に社会福祉法人聖家族会が設立されて事業が継続拡大された。41年重症心身障害児施設むつみの家、同年5月精神薄弱者更生施設のぞみの家、更に昭和48年5月、重症心身障害児施設あゆみの家、昭和62年10月精神薄弱者更生施設第2めぐみの家と次々に開園され、又増改築が繰り返されて現在のようになった。

現在、県営バスみさかえの園終点の直ぐ前にあるのがむつみの家（定員170名、職員232名）重症の心身障害児施設で、障害の程度に応じた小児科・脳神経科・整形外科の治療・看護・訓練が行われている。

その北側（上段）があゆみの家（定員100名、職員164名）行動障害を伴う重症心身障害児施設で、医学的治療・機能訓練、大人として精神的自立の芽生えを支援している。

最上段は厚生研修会館であり、職員の福利厚生・研修のための建物である。教養部・研修部・宿泊部・食堂部・売店部があって、ボランティア、見学者、父兄によく利用されている。

停留所から右手に下れば、めぐみの家（定員30名、職員19名）精神薄弱児施設で、学令児は公立小中学校特殊学級へ通学し、重度児



みさかえの園

はみさかえ養護学校へ通学している。また第2めぐみの家が並ぶ。
(定員70名、職員31名) 精神薄弱者更生施設で集団生活へ適応できる
よう身辺自立等の訓練をしている。

その南側（下段）がのぞみの家（定員106名、職員52名）精神薄弱者更生施設で生活指導と職業指導が行われ、一般社会生活に適応できるように訓練を行っている。特に椎茸栽培や養鶏、製茶、養蚕、機織り、手芸作品の作業など、能力と適性に応じた屋内外の作業指導が行われている。

その南側に、学校法人コルベ学園みさかえ養護学校がある。全国的に数少ない私立養護学校であり、入所中、学令にある重度心身障害児の教育のために開校された。

全体の入所者数は平成5年4月1日現在で476名、職員502名（関連施設の職員を除く）である。園と地区の交わりは緊密であり、町文化祭には作品の出品展示やクリスマス会には地区の子供達も招待があり、町婦人会も年末には慰問や労力奉仕等が恒例的に行われ、美しい交流活動が進められている。

小長井町郷土史年表

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
先繩文時代			今から約10,000年前、山茶花・弥次郎・田原大宮良各遺跡より剥片石器出土
繩文時代	(早期)	7,000年前	山茶花遺跡より楕円押型文土器、石匙、 たたき石、剥片石器、石渕遺跡より塞ノ 神式土器など、横ミ川遺跡より磨製石斧、 土器出土
	(前期)		山茶花遺跡より繩文土器出土
	(中期)	4,000年前	田原大宮良遺跡より土器、磨製石斧・石鏃
	(晩期)	3,000年前	弥次郎遺跡より扁平打製石斧・土器・ あわせぐち 合口カメ棺出土 小次郎遺跡より土器・扁平打製石器出土
弥生時代	(前期)	2,300年前	井崎支石墓群(ツボ型土器)
	(中期)	2,100年前 A D 0	下蔭平遺跡(箱式石棺・高坏・カメ型土器) 田原大宮良遺跡(ツボ型土器・高坏・ 磨製石斧、石剣) 黒仁田遺跡(磨製石斧)
古墳時代			城山古墳群、城山古墳、長戸鬼塚古墳、 丸尾古墳、大峰古墳
飛鳥時代			・和銅年代太良嶽三社大權現行基菩薩に より開創
平安時代	1085	応徳 2	山茶花に庵寺、カンカン石、雨堤石、万 念寺、皎月坊 「伊佐早之庄遠嶽の事・・・」

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
鎌倉時代	1185	文治 1	このころ田原村開拓や田原神社の創立
	1247	宝治 1	「伊佐早庄遠竹村地頭職を高木勝丸に沙汰付す。」
	1308	延慶 1	淀姫神社創立(井崎)
	1316	正和 5	藤原神社創立(小川原浦)
南北朝時代	1381	弘和 1	阿蘇神社(弘和6年 船津名椋木より城崎名勘々山。)
	1385	至徳 2	遠嶽氏宝篋印塔(南平墓石群)
室町時代	1474	文明 6	・西郷尚善伊佐早を統治(高城)
	1548	天文 17	田原六地蔵、・井崎村開拓(室町時代)
	1558	永祿 1	永祿年間…田原溜池(領主西郷氏の命により)仏石、新田原、田原大明神(一本松)、田原神社遷座(北山弥次郎へ) 田原城
	1562	永祿 5	遠岳治部少輔堯増(運)・井崎右衛門尉綱道(丹坂戦西郷純堯の陣)
	1568	永祿 11	妙金禪定尼(岩宗墓石群) 遠竹権現城、金胎寺(?)
安土・桃山時代	1575	天正 3	田原神社(現在地に遷座)
	1577	天正 5	西郷純堯、龍造寺隆信に降る(遠岳治部少輔堯増(運)・井崎右衛門尉綱道)
	1580	天正 8	宝池山西円寺(宝池院を改築、改名) 毘才天(毘沙天岳?)
	1582	天正 10	鶴田遠江守(遠竹) (岩宗墓石群、山庭宗年…)
	1583	天正 11	稚児の塔

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
安土・桃山時代	1584	天正12	肥前35万石太守龍造寺隆信、島原で討死 西郷一門の起請文（遠岳・井崎氏他）
	1589	天正17	小川原浦・井崎の井手水分覚書
	1597	慶長2	崇福院（崇福院を修築、改名） 高麗婆の墓（？）
	1600	慶長5	糸岐の誓願寺（阿弥陀如来→阿弥陀崎） 諏訪神社（慶長年間）
江戸時代	1605	慶長10	称念寺創立
	1639	寛永16	西円寺新築移転（田原）
	1662	寛文2	西円寺（阿弥陀如来、第3世正順師が本山より） 寛文年間、大久保馬頭観音 (再興明和8～安永6、門頭文化12)
	1674	延宝2	寛文～延宝年間に市杵島神社（長里） 大久保郷の開墾 淨真寺の寺号 柳新田（築切田）干拓、竜神碑 (江戸時代初期) (遠竹)
	1692	元禄5	阿蘇神社の鳥居奉建 元禄年間に田原溜池の修築
	1699	元禄12	田原、觀世音菩薩碑
	1700	元禄13	飯盛神社（田原）
	1703	元禄16	目島神社（妙見大菩薩）小川原浦 黒仁田、弁財天
	1720	享保5	淀姫神社の拝殿、鳥居（井崎）
	1724	享保11	井崎村小河原浦村境川井手水分覚 願主末方（目島神社境内、若宮神社）
	1743	寛保3	

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
江戸時代	1755	宝暦 5	諏訪神社（猿田比古神、天照皇太神宮）遠竹
	1762	宝暦 12	八坂神社（遠竹）
	1771	明和 8	一本松の弁財天 八大竜王（田神内）小川原浦
	1773	安永 2	実盛神社（牧）
	1775	安永 4	地蔵大菩薩（遠竹）
	1793	寛政 5	眼嶋神社（釜） 天神・弘法（寛政年間）小川原浦
	1801	享保 1	馬頭観音（遠竹）
	1814	文化 11	観音、稻荷（釜の大明神文化年間）
	1815	文化 12	阿弥陀（峰の辻）長里
	1816	文化 13	翁塚（市杵島神社境内）
代	1817	文化 14	稻荷（ごくくじょさん）小川原浦
	1818	文政 1	井手稻荷（田神境内）小川原浦
	1827	文政 10	山茶花の神、鳥越地神宮 (文政 10、元治元年田原)
	1830	天保 1	天満宮（新田原、文政 13?）
	1831	天保 2	天満宮（田原觀音境内）
代	1833	天保 4	八天狗（黒仁田）
	1834	天保 5	弘法（柳谷）
	1835	天保 6	山ノ神（牧）
	1838	天保 9	馬頭観音（南平）
	1840	天保 11	八天宮、金平神社（大正 12 年）築切
	1841	天保 12	馬頭観音（上南平） 観音平開墾（天保 12 ~ 嘉永、遠竹）
	1842	天保 13	普賢菩薩（川内）
	1851	嘉永 4	堤の神（牧の水神・弁財天、地神、碑文） 牧溜池
	1852	嘉永 5	淨真寺焼失（小川原浦）

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
江戸時代	1852	嘉永 5	金比羅權現（釜）
	1855	安政 2	愛宕（長里）
	1858	安政 5	藤原神社（拝殿）小川原浦
	1860	万延 1	金比羅（出口）
	1862	文久 2	田神（小川原浦）
			井崎村の茶の増産（万延～文久）
	1868	慶応 4	淨真寺再建（小川原浦） 宇良・長里村山争い
明治時代	1873	明治 6	遠竹小学校創立 井崎小学校設立 小川原浦小学校設立 田原小学校設立 長里小学校設立
	1874	明治 7	長里大久保水道開祖 崎原小学校に統合 (遠竹、井崎、田原各小)
	1878	明治 11	高来郡が南、北に分かれて北高来郡ができる。
	1879	明治 12	遠竹村と井崎村、田原村と小川原浦村、長里村と合併して3村となる。
	1881	明治 14	諫早～湯江間県道開通する。
	1885	明治 18	長里新開、長里干拓完成する。
	1886	明治 19	諫早、小長井間に県道ができる。
	1889	明治 22	小学校令制定…義務制実施
	1889	明治 22	井崎村、小川原浦村、長里村が合併して小長井村となる。
	1892	明治 25	客馬車の貨送がはじまる (諫早泉町－湯江三部壱－井崎舟津)

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
明治時代	1896	明治29	小長井警察官駐在所設置される。
	1899	明治32	崎原小学校、長里小学校の2校が統廃合し小長井尋常高等小学校創立され、長里小学校、遠竹小学校分校となる。
	1901	明治34	長里尋常小学校と改称し独立校となる。
	1901	明治34	遠竹尋常小学校と改称し独立校となる。
大正時代	1917	大正6	諫早（新橋）～小長井井崎まで乗合自動車（諫早自動車合名会社）
	1920	大正9	小長井駐在所に直接電話架設された（村の電話のはじまり）
	1921	大正10	電灯がつく。
	1924	大正13	小長井郵便局電信電話業務開始
	1926	大正15	長里警察官駐在所設置される
昭和時代	1934	昭和9	諫早、肥前山口間鉄道開通する。（現長崎本線）
	1938	昭和13	諫早～小長井間バス運行される（西肥自動車会社）
	1941	昭和16	国民学校令施行各学校校名変更
	1945	昭和20	長崎市へ原子爆弾が投下される。（死者7万人余）
	1947	昭和22	学校改革6.3制実施
	1947	昭和22	新制小長井中学校発足
	1948	昭和23	聖母の騎士園開設される
	1949	昭和24	小長井小学校田原分校発足
	1949	昭和24	けがれなき聖母の騎士聖フランシスコ修道女会が結成される。
	1950	昭和25	青年学級開設

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
昭和時代	1952	昭和27	婦人学級開設
	1953	昭和28	聖母の騎士園小中学校開校する。
	1957	昭和32	諫早大水害が襲う、小長井被害甚大
	1958	昭和33	小長井村公民館報第1号発刊
	1959	昭和34	田原小学校独立
	1959	昭和34	ふたば保育園認可される
	1961	昭和36	中央公民館竣工（小長井小学校々舎移転）
	1961	昭和36	精神薄弱児施設みさかえの園開園される。
	1961	昭和36	清和保育園認可される
	1961	昭和36	バス田原まで運行を始める
	1962	昭和37	県下豪雨諫早、高来、小長井被害甚大
	1962	昭和37	県営バス 農場線、椿原線延長する
	1962	昭和37	小長井小学校 鉄筋6教室完成
	1964	昭和39	遠竹保育園 認可される
	1966	昭和41	町制施行、役場庁舎新築落成
	1966	昭和41	小長井小学校保健体育優良校として文部省より表彰される。
	1967	昭和42	井崎保育園認可される
	1969	昭和44	第24回長崎国体山岳競技幕営地になる
	1969	昭和44	第5回全国身障者スポーツ大会臨席の折 皇太子殿下小長井町にこられる。
代	1969	昭和44	高来、小長井みかん選果場竣工する。
	1970	昭和45	田原小学校と小長井小学校を統合して 小長井小学校となる。
	1971	昭和46	町営スクールバス運行開始する。
	1972	昭和47	鹿ノ塔斎場竣工する。
	1973	昭和48	長里小学校 校舎新築落成する。
	1973	昭和48	町営プール竣工する。

時代	西暦	年代・年号	郷土のあゆみ
昭和時代	1975	昭和50	町民センター新築落成、老人福祉センター（めしま荘）設置する
	1975	昭和50	小長井カントリー（ゴルフ場）オープンする。
	1976	昭和51	大橋架橋工事竣工、国道207号線開通する。
	1976	昭和51	小長井郷土誌発刊（町制10周年記念）
	1982	昭和57	遠竹小学校校舎新築落成
	1983	昭和58	学校給食を開始する（給食センター設立）
平成時代	1991	平成3	多目的福祉センター山茶花会館竣工開始する 長里地区コミュニティセンター完成する 毘沙天岳公園が完成する 山茶花高原ピクニックパーク開園する (総合レジャー施設)
	1993	平成5	長里農業構造改善センター「おがたま会館」竣工する
	1994	平成6	鹿ノ塔斎場竣工する 柳新田土地改良事業完成 防災行政無線システム開局
	1995	平成7	田原町民グラウンド完成 広域基幹林道多良岳横断線開通
	1996	平成8	山茶花高原ハーブ園オープン 長里小学校新校舎が落成
	1998	平成10	遠竹小学校体育館が落成 文化ホール建設工事起工 山茶花高原風力発電機が本格稼動
	1999	平成11	住民投票実施 小長井文化ホールオープン

あとがき

地域の歴史的環境や文化的遺産を知り、広く保存継承していただくために町広報紙「こながい」の中で「わたしたちの文化財」として紹介して参りました。そこでこの中から主なものを整理して町の案内書「小長井町の文化財」としてまとめました。

調査、説明、記述の面に不十分な点もあるかと思いますが、この書の利用と文化財について多くの関心と今まで以上に文化財保護についてご協力をお願いできたら幸いと存じます。

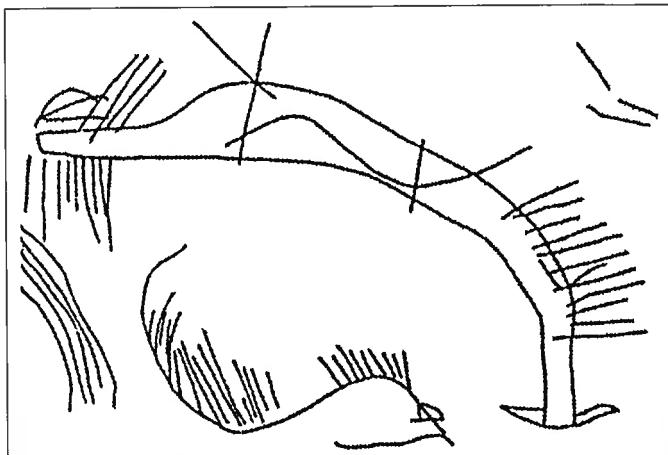
●参考文献 長崎県地名大辞典（角川書店）、長崎の伝説（角川書店）
高来町郷土史、小長井町郷土史、諫早街道をたずねて（山崎諭）、
諫早市史、諫早史談会誌、神話伝説辞典、仏教大辞典、
日本の民俗「長崎」（山口麻太郎）

●執筆担当者、小長井町文化財保護審議委員

中島忠、島崎秋芳、山口力、西山敏勝、森春義、林正晴、

（元）山口正治、（元）新宮富男、（元）浜崎英夫、（元）永渕勝己

7世紀前半築造長崎・長戸鬼塚古墳



前室の腰石に刻まれた鯨。海面に立てた尾がはっきりと描かれている。
右上の線刻は鯨を追い込む漁具とみられている。 =線刻画を模写



さざんかの花

小長井町の文化財

改 訂 平成12年3月1日

発 行 者 小長井町教育委員会
長崎県北高来郡小長井町小川原浦名825

執筆編集者 小長井町文化財保護審議会

印 刷 株式会社 インテックス
長崎市幸町6番3号
TEL.095-826-2200

